

市立函館博物館

# 研究紀要

第27号



2017

市立函館博物館

# 研究紀要

第27号

2017

## 序

このたび『市立函館博物館研究紀要』第27号を刊行する運びとなりました。

本号は、当館所蔵アイヌ民族資料のコレクションの中から故児玉作左衛門氏が収集した児玉コレクションについて「児玉コレクションの収集経過とその周辺」と題し、当館学芸員の大矢京右がまとめました。

当館ではこれまでに寄託されていた児玉コレクションの目録を2部刊行しています。さらに目録刊行後にも資料の追加寄託がありました。今までに寄託された資料は現在、大部分は寄贈となっております。また、児玉コレクションはこれまでも他館の図録等で部分的に紹介はされてきました。本稿では、当館所蔵児玉コレクションの全容について明らかにするとともに、児玉氏のライフヒストリーについても紹介します。

平成2年から刊行をはじめた当館研究紀要は、刊行物として発行するのは本号が最後となります。これまでに当館職員はもとより、当館に関わられた多くの方々にもご執筆いただきましたことを心よりお礼申し上げます。

研究紀要は刊行物としての形態を見直し、今後は当館ホームページにおいて、新たに論考や資料紹介等を掲載します。紙幅の制限も少なくなり、資料写真もカラーで掲載できますので、より充実した情報発信の場としていきたいと存じます。

本号の論考が、幅広く利活用されることを期待いたしますとともに、新たな形での研究紀要に対しましても、関係各位におかれましては忌憚のないご意見、ご提言をいただけますようお願い申し上げます。

平成29年3月31日

市立函館博物館長

齊藤 総一

————— 目 次 —————

序

児玉コレクションの収集経過とその周辺

大矢 京右 …………… 1

# 児玉コレクションの収集経過とその周辺

大矢 京右

## はじめに

児玉作左衛門(1895-1970)は解剖学を専門とした北海道大学名誉教授であり、形質人類学的研究の一環としてアイヌ研究(骨格)を行うとともに、アイヌに関する物質文化資料の収集も広く行った研究者である。収集された資料群は通称「児玉コレクション」と呼ばれ、児玉の死後、収集された資料群はその遺族に引き継がれ、1998(平成10)年に市立函館博物館(函館市、以下「函館博物館」と財団法人アイヌ民族博物館(白老町、現一般財団法人アイヌ民族博物館、以下「アイヌ民族博物館」)にそのほとんどが寄託・寄贈されている。

現在児玉コレクションは様々な意味で非常に有名なコレクションとなっているが、その実、コレクションの構成や現状などについては今なお詳細には把握されておらず、その名称とイメージだけが一般に流布・定着しつつある感もある。

本稿は、函館博物館所蔵児玉コレクションの学術的な位置づけを明確にするとともに、今後の利活用に資するため、収集の背景となる児玉作左衛門のライフヒストリーおよび児玉コレクションの成り立ちやその構成内容、そして函館博物館への寄託・寄贈経緯や管理状況等について、函館博物館で保管されている公文書類などの簿書や児玉家所蔵資料の調査、さらに文献の調査およびフィールドワーク、そして関係者への聞き取り調査などをとおして判明した事実について紹介するものである。

## 1. 児玉作左衛門のライフヒストリー(戦前)

### 1-1. 研究者になる以前

#### 1-1-1. 児玉家の源流

児玉作左衛門の父である児玉善吉(1867-1922)は、秋田県鹿角郡小枝指村(現在の秋田県鹿角市花輪字小枝指)の生まれであり、同村は農業を基幹産業とした比較的小さな集落であった。児玉善吉は同村の小学校を卒業した後「盛岡医学専門学校」<sup>i</sup>で医学を学び、同校卒業後に上京している。上京後、前後関係は定かではないが、東京帝国大学医科大学選科で眼科を学び、1890(明治23)年7月25日に埼玉県出身の島田モト(1870-1933)と結婚。同大学で学びながら東京市内の神田区および本所区で眼科医として開業し、妻のモトは荻野ぎん(1851-1913)のもとで産科学を学んだ産婆であったことから、夫である善吉とともに医院で産婆として働いた。

児玉善吉・モト夫婦の間には長女:トヨ、長男:年重郎、次女:マン(後の函館遺愛幼稚園主事)が生まれ、児玉作左衛門(以下「児玉」)は、1895(明治28)年12月3日に第4子次男として東京で出生した<sup>ii</sup>。東京には児玉が3~4歳の頃まで暮らしていたようであるが、どのような経緯があったかは不明であるが、一家は一時的に父:善吉の出身地である秋田県鹿角郡に転居し、同郡の中心地区である花輪町字中花輪の花輪小学校(現在の秋田県鹿角市花輪町字中花輪114-2)の向かいに眼科医院を開業する<sup>iii</sup>。そして花輪町で開業してわずか1~

2年ほど後である1900(明治33)年頃には、一家で函館に移住するのである。

この一見性急な移住については、従来「父の眼科医開業のため」【長谷部2000:122】と説明されており、児玉家所蔵『此度北海道ニ参ル理由并ニ此後之心得』にも「この地に多き眼病を治療して社会に奉仕すると共に、わが子等に生きた教訓を与えんとするものにほかならず」との記述がある。また、同じく児玉家所蔵『故児玉モト略伝』によると、この時にすでにクリスチャンとしての洗礼を受けていた児玉善吉・モト夫婦が、花輪では当時不可能であった子供達の「宗教的教育」を充実させるためのものであったとの記述もある。父：善吉はそれまでもすでに東京・秋田で眼科医を開業しており、「眼科開業のために函館に移住」という説明だけでは移住の理由として整合性に欠けるが、これらの複合的な理由により函館への移住が実行されたものと推測される。いずれにせよこうして児玉少年は、学齡期以降の多感な少年時代を函館で過ごすことになるのである。



現在の小枝指集落遠景  
【2014年12月撮影】

#### 1-1-2. 函館での少年時代

函館に移住してきた児玉一家は、1901(明治34)年8月17日に転籍届を提出し、当初

函館区曙町14番地に居を定めるが、その後区内宝町1番地9(現在の函館市宝来町23番付近)に転居し、児玉眼科病院を開業する。なお、118坪ある同地は1907(明治40)年3月19日付で児玉善吉所有の宅地として登記されており、このほかに会所町30番地にも74坪の宅地等を所有していた(1912(明治45)年5月15日付登記)<sup>iv</sup>【久保1915】。



児玉眼科病院の外観(撮影年不明)  
【児玉家所蔵】



児玉善吉愛用のライヘルト顕微鏡  
【函館博物館所蔵】

函館では両親の熱望した「宗教的教育」が実践され、児玉は後年自らの回想記に以下のように記述している。

私の父は眼科医であったが、熱心なクリスチャンで相生町の日本基督教会の長老をつとめていた。毎日の生活は厳格そのもので、朝

起きて洗面をすますと机の前に端坐して聖書を読み祈祷を捧げるのであるが、そのあといつもドイツ語の聖書を大声で読んでいた。それが終ると母と子供ら六人が父の部屋に行き朝の家庭礼拝をするのである。まず讚美歌をうたって、聖書を読んで、一人ずつ順番にお祈りして、頌詠をうたい、主の祈りを捧げて終る。それから朝食をして学校へ出掛ける。夕食前には夜の礼拝をするのであるが、時にはこれにお説教が加わるのでずいぶん長くなることもあった。これが毎日欠かさず行われたのであるから、今思うと父の意志の強かったのにはただただ驚くばかりである。聖書は旧約聖書と新約聖書を始めから終りまで何度読んだかわからない。登校を前にして気の急ぐ冬の朝や、遊び疲れてねむくなっている夏の夜などは、礼拝に出るのがいやだなと思ったこともあるが、とにかく十数年間—私は二高に入ったので家を離れるまで—これが続いた。兄弟たちもだんだん大きくなって、東京や京都に行くようになったが、休暇で家に帰ってきてあの礼拝に出るのを皆でなつかしがっていた。時には父と母と二人きりで礼拝をすることもあったらしいが、父は死ぬまでこの礼拝を続けた。私は中学を卒業するとき、最後の試験の日に高熱でたった一日欠席したので皆勤証は貰えなかったが、丁度その時父は上京中で留守であったが、心に弛るみが出来て、礼拝をおろそかにしたからであると、非常に叱られたことがある。<sup>v</sup>

学齢期に達した児玉は函館区立弥生尋常小学校に進学し、学級長を務めるなどこのころから成績優秀であったようである<sup>vi</sup>。そしてこのころから父が愛好する人類学に関する学術書や骨董品に興味を覚え、後の研究者としての素地を育む一因となった。特に古銭については造詣が深く、前述の回想記に以下のように記述している。

私が中学に通っていたころ、ある日家の蔵を片付けていると古銭がたくさん入っている古ぼけた箱がでてきた。早速これを父に見せると、これはお前にやるからせいいりしたらよからうといわれた。私は大喜びで何日か夢中になって古銭の本を読みながら分類した。この古銭は今でも私の所にあるが、あれが動機となって私の古銭蒐集がはじまったのである。私はその後考古学に興味を持つようになったが、子供の頃物好きからはじめたこの古銭の趣味が、後になってこの考古学の研究に役立つようになったのだから感慨無量である。<sup>vii</sup>

なお児玉の収集した古銭は後年その一部が市立函館図書館に寄贈されており、同館の所蔵貨幣目録（1942年刊）にその名を確認することができる。児玉は1908(明治41)年3月に弥生高等小学校第2学年を修了し、同年4月9日に北海道庁立函館中学校（以下「函館中学校」）へ進学している<sup>viii</sup>。



児玉家家族写真（1914年撮影、後列右が児玉）  
【児玉家所蔵】

### 1-1-3. 青年期と東北帝国大学進学

小学校時代同様、児玉は函館中学校在学時も成績優秀であったようである。同校の後身である北海道立函館中部高等学校に残されている函館中学校第15回卒業生名簿

には、名前とともに「医科大学卒業医学士 東北帝国大学助教授」と筆頭で明記されており、おそらく首席で卒業したものと推測される。



函館中学校在学時の児玉（前列右から1人目）  
【北海道立函館中部高等学校所蔵】

1913(大正2)年3月22日に函館中学校を卒業した児玉は、宮城県仙台市の第二高等学校へ入学、1916(大正5)年6月30日に同校を卒業した後、同年7月10日に東北帝国大学医学部へ進学した。同大学では布施現之助教授(1880-1946)と長谷部言人助教授(1882-1969)のもとで解剖学について学び、1920(大正9)年7月10日に医学士の学位を取得している。



児玉の学士学位記  
【児玉家所蔵】

なお、東北帝国大学在学中の児玉の生活状況等に関してはよくわかっていないが、後に妻となる嶋原とみ(1900-1988)とは二

人とも同じキリスト教徒という縁でこの頃に出会い<sup>ix</sup>、東北帝国大学卒業後の1921(大正10)年7月16日に結婚した。

## 1-2. 研究者となって以降

### 1-2-1. 東北帝国大学在籍時

児玉は、医学士学位取得後も東北帝国大学医学部助手として研究室に残り、このときに助教授から教授となっていた長谷部言人について熊本県の轟貝塚(縄文前期)を訪れ、初めての発掘調査を経験している。また、1921(大正10)年8月2日には助教授に昇進、前述のとおり妻：とみと結婚して長男：十山と次男：善次をもうけるとともに、1922(大正11)年12月25日から1926(大正15)年3月31日まで<sup>x</sup>スイスのチューリッヒ大学脳解剖学研究所へ留学して神経学者 Monakow, Constantin von (1853-1930) に師事するなど、公私ともに充実した時期を過ごした。さらに、父：善吉が1922(大正11)年10月23日に死去したことにとまって、家督相続して函館の児玉眼科病院の院主も一時期務めていたようであり<sup>xi</sup>、極めて多忙の日々であったことが想像される。



チューリッヒ大学脳解剖学研究所の研究員  
(1923年撮影、後列左端が児玉)  
【児玉譲1997:43】

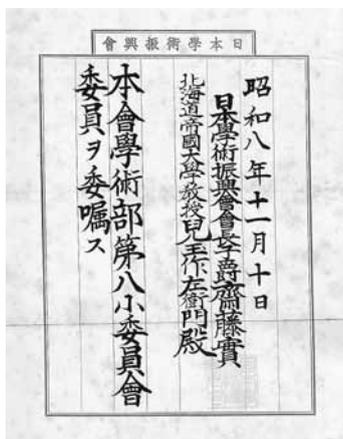
児玉は1926(大正15)年6月27日に帰国した後、チューリッヒでの研究成果を学術誌に発表し、1928(昭和3)年7月13日に「中

「中枢神経系に関する解剖学的研究」で博士号を取得。その後1929(昭和4)年に九州帝国大学に転任した解剖学者平光吾一(1887-1967)の後任として、北海道帝国大学へ赴任することとなった。この際に児玉は、恩師である長谷部から北海道でのアイヌ研究への着手について囑望されたといい【伊藤1971:143】、児玉自身「こどもの頃から親しみをおぼえていたアイヌの研究ができるというので非常に喜んだ」と語っている【児玉作1969:7】。

## 1-2-2. 北海道帝国大学在籍時

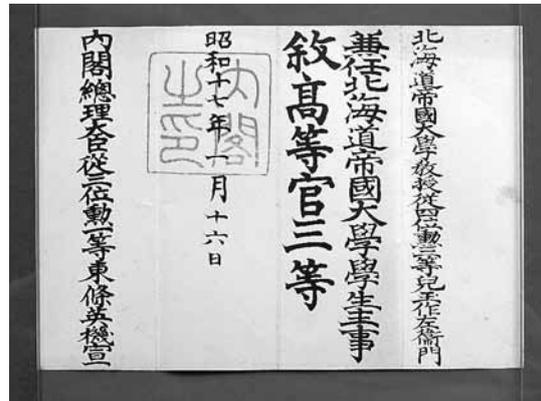
### 1-2-2-1. 骨格研究

1929(昭和4)年5月10日付で北海道帝国大学医学部教授に任ぜられた児玉は、解剖学第二講座で人脳および人頭骨に関する研究・指導を行うとともに、それらに必要な人骨<sup>xii</sup>の収集に精力を傾注した。また、1932(昭和7)年に秩父宮雍仁親王が総裁となって設立された財団法人日本学術振興会の第八小委員会(「アイヌ」の医学的民族生物学的調査研究)で解剖学部を担当することとなり、1934(昭和9)年の八雲での発掘を皮切りに1939(昭和14)年までの間に北海道・樺太・千島でアイヌ墓<sup>xiii</sup>の発掘を行い、500以上のアイヌの人骨を収集した。



日本学術振興会の1933年11月10日付委嘱状  
【児玉家所蔵】

また、1940~1941(昭和15~16)年には網走のモヨロ貝塚(オホーツク文化期)や大曲洞窟遺跡(縄文時代)の発掘調査を行い、アイヌ以前の人骨収集も行っている。これらの発掘で得られた人骨は、北海道帝国大学で保管・研究されるとともに『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』や『北方文化研究報告』などの学術誌においてその成果が公開された。なお、これら研究の成果が評価された児玉は、1942(昭和17)年には北海道帝国大学学生主事に、翌1943(昭和18)年には北海道帝国大学医学部長に任命されている。



北海道帝国大学学生主事の任命状  
【児玉家所蔵】

	墓数	人骨数	頭骨数
八雲	133	131	118
落部		103	77
森		57	42
長万部	31	29	29
浦幌		62	48
樺太栄浜		46	34
北千島シュムシュ島		28	28
その他			116
合計		(500以上)	492

1934~1939年に児玉が収集したアイヌの人骨数  
【植木2008:116より】

### 1-2-2-2. 物質文化資料収集

児玉は北海道赴任以降アイヌの民具収集を開始したが、当初は自らの趣味であっ

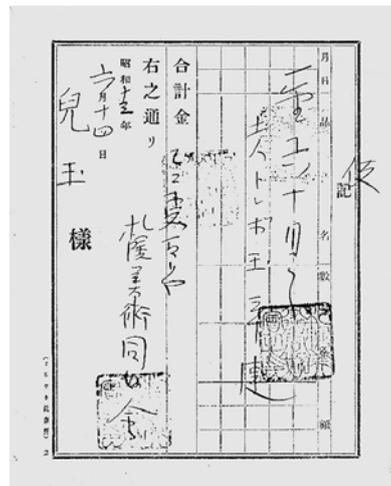
たいわゆる「トンボ玉」の収集が主であったという<sup>xiv</sup>。しかしアイヌ研究を進めるにつれその収集の幅を民具全般にまで広げていることは、その後の収集活動からみても明らかである。なお、児玉家所蔵資料の中には資料購入に係る領収書の一部が残されており、その内容から児玉の資料収集の推移をある程度見て取ることができる。

児玉は「特に昭和15、6年頃までは、毎日曜日は骨董屋通いをし」、「使用目的のわからない物を買うと、決まって杉山寿榮男先生の「アイヌ芸術」を見て」研究していたという【児玉マ1989】。また児玉の長女：児玉マリ氏は、「昔、札幌市内の千秋庵の向かいにあった「横信」に行くと、店主が私のためにお菓子を買ってくるものだから、父も何か買わなきゃという気持ちになることもあったみたい」「龍泉閣などは、わざわざうちまで訪問販売にやってきました」「講演のために出張すると、謝礼金で資料を購入してくるので、謝礼金を持ち帰ったためしがありませんでした」など、日ごろから古物商と懇意であった児玉の資料収集熱について記憶されている。児玉の資料収集と古物商の関係については、児玉自身以下のように回想している<sup>xv</sup>。

古本屋と骨董屋は私の街の研究室である。ここで北方文化関係の文献や土俗品類を探しもとめるのである。アイヌの土俗品はたとえば衣服、首飾、ヒゲベラ、刀剣、狩猟具または日常具等である。本来ならばアイヌ部落に行って探すべきであるが、われわれが部落に行く時は研究が精いっぱいであって、物の買出しなどのひまは全然ない。これは非常に手数のかかる厄介な仕事である。以前には札幌にはアイヌの土俗品に対して非常に目のきく商人がいて、よくアイヌ部落へ行って古いよいものを探してきたものである。この人たちは長年の間実際のものを見て、また

よく研究するし、専門家たちからいろんなことを聞くので、なかなか鋭い鑑識眼をもっていった。このうちに仙人みみたいな風がわりな、骨董屋さんが一人いたが、(中略)私のアイヌ土俗品の三分の一はこの人が持ってきたものであり、また教えられたことも少なくない。

児玉の民具資料収集は戦後にかけて加熱していき、骨董屋からの購入だけでなくアイヌからの直接購入や、購入を前提とした資料作成依頼なども見られるようになる。これについては後の項において詳述することにした。



札幌美術同好会（横信）の領収書（1938年）  
【児玉家所蔵】

## 2. 児玉作左衛門のライフヒストリー（戦後）

### 2-1. 北海道大学在籍時

#### 2-1-1. 発掘調査と研究成果

北海道大学（以下「北大」）在籍時をとおして児玉は相当数の発掘調査を行っているが、アイヌ墓発掘に関する調査報告書は1934(昭和9)年に調査を行った「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」(1936年発表)しか確認できず、解剖学および形質人類学の分野でおもに出土した人

骨を分析したことによる研究成果が発表されるばかりで、発掘の経緯や出土状況等に関する考古学的な報告はほとんどなされていない。しかしこの傾向は戦後にかけて徐々に変化する。

まず1941(昭和16)年以降に行ったモヨロ貝塚(網走市)発掘で得られた結果を基に、出土人骨の解剖学・形質人類学的分析を援用した遺物の考古学的な論考を1948(昭和23)年に学術書『モヨロ貝塚』として刊行し、同年の第二回北海道新聞文化賞を受賞したのである。この後児玉は道内各地で行った旧石器時代・縄文時代・オホーツク文化期の遺跡の考古学的発掘調査について、自らが委員を務める「北方文化研究室」が刊行する『北方文化研究報告』などで積極的に発掘調査報告を行うようになる<sup>xvi</sup>。なかでも函館博物館と共同で行った1949(昭和24)年の桔梗村(現在の函館市桔梗町)サイベ沢遺跡(1958年に報告書刊行)や1950(昭和25)年の函館市住吉町遺跡(1954年に学術論文発表)での調査は、その研究成果が高く評価されるとともに、出土遺物が北海道の文化財に指定されるなどしている<sup>xvii</sup>。



1948年刊『モヨロ貝塚』  
【函館博物館所蔵】

これら縄文時代遺跡等の発掘調査報告が

増加する反面、アイヌ墓発掘に関する考古学的調査報告については、前述のとおりほとんど記録に出てこない。児玉の最晩年の著書『Ainu historical and anthropological studies』(1970年発行)に掲載された人骨の発掘数一覧表と、戦前の論文「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」(1939年発表)に掲載された人骨の発掘数を比較すると、1940年代以降にも網走を含む北見常呂や樺太・千島で新たに収集された人骨等の収蔵が認められるとともに、児玉自身日高各地で35の頭骨を収集したと記述しているが、それら発掘数以外に具体的な調査内容は明らかでない。

	出土地	～1939年	～1970年
北海道	八雲	118	118
	落部	77	77
	森	42	42
	長万部	29	29
	十勝浦幌	48	48
	北見常呂(網走含む)		36
樺太	栄浜魯礼(内淵含む)	34	34
	その他		14
千島	シムシム島	28	22
	パラムシル島		3

北大が所蔵していた発掘頭骨数  
【植木2008をもとに作製】

## 2-1-2. 民具収集

札幌に転居して以来児玉のライフワークとなっていたアイヌ民具収集はより熱を帯びていくようになり、戦後札幌市内に増えつつあった多くの古書店や骨董店で民具を買い求めている。戦中の疎開などで札幌から撤退していた古書店は終戦後次第に札幌市内に戻りはじめ、なかでも山野成之が経営する一誠堂書店はいち早く札幌三越前の一等地を取得し、当時東京以北では随一の古書店として商い振りを発揮させていたという<sup>xviii</sup>。また児玉の残した領収書類を見ても、当時札幌市内でとくに幅をきかせていたという「一誠堂書店」「文献堂書

店」「南陽堂書店」との取引がやはり群を抜いている。

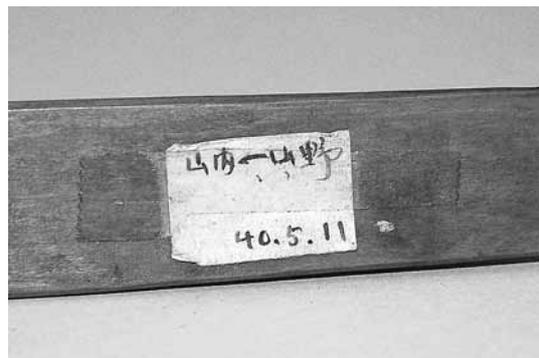
児玉は一度の買い物(領収書)で100,000円を超える支払いもしばしばあったが、特に一誠堂書店の1956(昭和31)年11月7日付領収書には、「アイヌモノ一式」で「920,000円」という当時としては驚くべき金額が明記されており、児玉のアイヌ民具収集にかけるただならぬ熱意を感じさせる。国立大学の教授を務めるとともに各種要職に就き、日本全国で講演活動なども行っていたにせよ、当時この金額はそう簡単に出せるものではないだろう。このことについて児玉マリ氏は「それなりのお手当をもらっていたとは思いますが、当時の生活自体はとても慎ましく、母(児玉とみ)が新しい着物を着ているところなど見たことがありませんでした」と述懐している。また、児玉のアイヌ民具収集は広く知られていたことから、古物商だけでなく個人が直接自宅や研究室まで売り込みに来ることもあったという。



1956年11月7日付一誠堂書店の領収書  
【児玉家所蔵】

児玉はアイヌ関係資料を購入すると領収書を貰うようにしていたが、稀に文字の

読み書きができない者が来ると児玉が相手に代わって直筆の領収書を作ることもあったという<sup>xix</sup>。領収書の品書きは、ほとんどが「アイヌモノ一式」や「アイヌ道具一山」など現在の児玉コレクションと照合することが困難な表記が為されているが、現物資料の中にはごく一部ではあるが「40.5.10 山内コレクション」などのラベルが貼り付けられたものもあり、これらについては領収書の日付から照合することが可能である。また品書きの中には「土偶」や「土器」など児玉の考古学的研究への関心を傍証するものも出てくるようになり、1950(昭和25)年5月21日には函館の在野の考古学者阿部龍吾<sup>xx</sup>のもとへ電車で「土石骨器」を譲り受けにしている<sup>xxi</sup>。



イクパスイ裏面に貼られたラベル  
【児玉マリ氏所蔵 函館博物館寄託資料】

## 2-2. 北海道大学定年退官後

### 2-2-1. 研究

児玉は1959(昭和34)年に北大を定年退官したが、その後も名誉教授として北大に通い、研究を継続した。依然として静内町や江別市など道内各地で発掘調査に関わっているが、発掘調査報告書はもちろん、考古学関連の論文を発表することもなく、解剖学に関する論文も最晩年の1970(昭和45)年に発表された「アイヌ頭蓋に見られる損傷問題」くらいしか確認されない。しかし

すでにアイヌ研究の「大家」として名を成していた児玉は、アイヌに関する総論的な学術論文を多くの学術書に発表するとともに、自らの研究の総括ともいべき学術書『Ainu historical and anthropological studies』（英文）を刊行している。児玉の研究成果は高く評価され、紫綬褒章（1960（昭和35）年）や北海道文化賞（1965（昭和40）年）、勲二等旭日重光章（1966（昭和41）年）などをこの時期に受賞・受章し、当時の新聞などでも大きく取り上げられた。【北海道新聞1960、朝日新聞1961など】

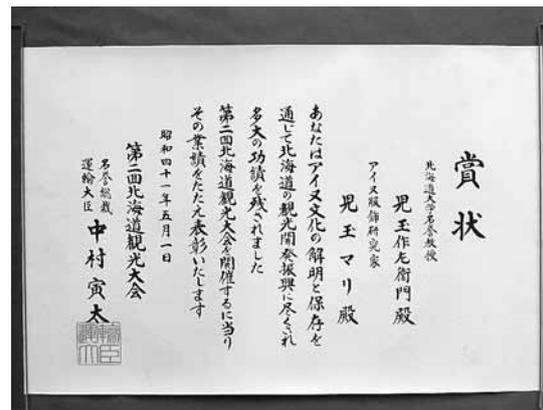


勲二等旭日重光章受章時の記念写真  
【児玉家所蔵】

また、多忙であった自らの代わりに妻：とみに「アイヌの首飾り」に関する研究を、長女：マリに「アイヌの衣服」に関する研究を委嘱し、1960年代後半には集中的にその成果が公表された。それらの研究にあたって、特に自らの研究の助手をさせていた長女：マリには、1959（昭和34）年以降自家用車で道内各地の調査に同行させるとと

もに、平取町二風谷からアットゥシ織りの巧みな女性を招聘して技術を体得させるといった徹底ぶりであった【児玉マ1971:2】。その結果、「アイヌ文化の解明と保存を通じて北海道の観光開発振興に」「多大の功績を」残したとして、1966（昭和41）年5月1日に札幌市民会館で開催された第2回北海道観光大会において、児玉作左衛門・マリ連名で北海道観光功労賞を受賞している。

児玉は1970（昭和45）年12月26日の未明に心筋梗塞でこの世を去るが、亡くなる前日の20時頃まで校正を行っていたという学術書『明治前日本人類学・先史学史—アイヌ民族史の研究（黎明期）—』は、死後1971（昭和46）年3月に刊行された。



児玉作左衛門・マリ連名の北海道観光功労賞  
【児玉家所蔵】

## 2-2-2. 民具収集

北大を定年退官後の児玉のアイヌ民具収集は、教授職による収入が無くなったためか領収書の枚数・額面ともに低下するが、領収書等を見る限り、依然として「一誠堂書店」「文献堂書店」「南陽堂書店」といった大手の古書店との取引は継続されているし、少ないながらも大東京美術株式会社など新規の取引先も開拓している。また、長女：マリのアットゥシ織りの師である平取町二風谷の貝澤はぎ嬭や、同じくアットゥシ

織りの名人であった旭川市近文の砂澤ベラモンコロ媼、木綿衣制作の巧みな静内の人里カツ媼や戦後に樺太から常呂に移住してきた樺太アイヌ文化の伝承者である西平ウメ媼らには、実際に資料作りを依頼して完成物を送ってもらっていたという<sup>xxii</sup>。

さらに民具収集の方針も、当時の児玉の研究内容を反映して、アイヌの服飾品に関するものがその割合を増やしており、児玉コレクションのなかでも特に有名な美しい衣服資料類は、この時期に収集されたものが大きな部分を占めていると推測される。これらの資料群は児玉の死後に日本全国の展覧会に貸し出されるなどしたが<sup>xxiii</sup>、1980(昭和55)年前後に白老町立白老民俗資料館(白老町、後のアイヌ民族博物館)や函館博物館(函館市)に貸出・寄託されていくこととなるのである。



函館市にある児玉家の墓所  
【2010年4月撮影】

### 3. 児玉コレクションの成り立ちと構成

前項まで児玉のライフヒストリーを概観したが、児玉の研究活動の中で収集・構成された児玉コレクションは、その定義および総体について曖昧なままその存在が広く

社会的に認知されている。また、資料収集の経緯などの側面からも、「およそ40年にわたり私財を投じて」「蒐集した先史考古、民族学に関わる資料」【長谷部2000:122】というものもあれば、「おもに墓地からの発掘品によって成り立っている」【植木2008:118-119】というものもあるなど、その評価は一定していない。

本項では、児玉コレクションの成り立ちから、現時点で確認しうる構成内容について述べる。

#### 3-1. 児玉コレクションとは

##### 3-1-1. 「児玉コレクション」という用語

児玉コレクションとは、単純には「児玉」作左衛門の「コレクション(収集品)」と理解されるが、この呼び名については「いつの頃からか人伝に」「呼ばれるようになった」【長谷部2000:122】と言われている。1980(昭和55)年に函館博物館へ寄託される際の新聞報道でもすでに「児玉コレクション」という語が頻出しており、その正体がよくわからないまま呼び名だけは世間で一般化していたということができよう。

この呼び名について文献でさかのぼってみると、1954(昭和29)年6月26日に開催された「児玉教授開講二十五周年記念式」の鎌田巖委員長挨拶において、「アイヌ民族、先住民族の御研究、特にあの標本室に納められたコレクションの膨大な盛観」【児玉讓1997:30-31】と語られていることがわかる(下線は筆者付与)。また児玉マリ氏によると、「戦後札幌に駐留してきた米軍の将校が標本室を見学して、「Collection」という言葉を用いたのが最初でした」としており、戦後間もない時期にはすでに児玉コレクションという呼び名が使われていたと考えられる。

### 3-1-2. 児玉コレクションの範囲



児玉存命時の医学部標本室の様子（一部加工）  
【児玉家所蔵】

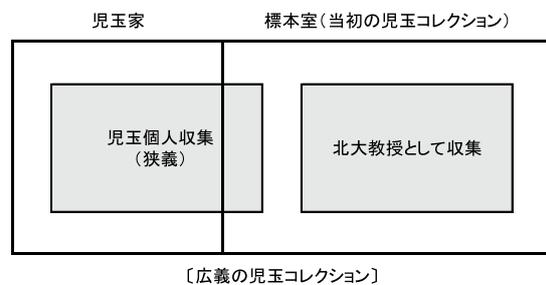
ではこの戦後間もない時期から「児玉コレクション」として認識され始めたモノは、一体どのようなものであったのだろうか。

現在児玉コレクションに含まれる資料群については、児玉が収集した一切の物質文化資料を広義の児玉コレクションであるとする解釈があるほか、前述の「およそ40年にわたり私財を投じて」「蒐集した先史考古、民族学に関わる資料」【長谷部2000:122】（下線は筆者付与）といったように、より狭義な「児玉が私費で購入した資料群」とした解釈もある。しかし、前述の児玉コレクションという呼び名の成り立ちや、1954(昭和29)年の「標本室に納められたコレクション」【児玉譲1997:30-31】という挨拶、また1974(昭和49)年に児玉の後任である伊藤昌一いとうまさかずが「(標本室に陳列された) これら民俗品には一部児玉教授個人所有のものも含まれているが、いわゆる「児玉コレクション」として知られている」【伊藤1974:290】（括弧内は筆者付与）として

いることから、当初の児玉コレクションとは「北大医学部の標本室に納められていたもの」であったと理解できる。特に伊藤昌一の記述からは、当時「児玉教授個人所有のもの」と児玉「コレクション」が本来的には別のものとして認識されていたことが伺われる。

### 3-1-3. 児玉コレクションの内容

「北大医学部の標本室に納められていたもの」については、児玉が1954(昭和29)年の自らの挨拶の中で「図書は充実し、脳や頭蓋をはじめ各種の標本はもちろん、アイヌ民族の土俗品並びに本道各地の遺跡より発掘された考古資料」【児玉譲1997:34】としているように、前述した広義の児玉コレクションと一致するように見える。しかし児玉マリ氏によると、児玉が北大教授として公費で収集した資料については悉く標本室に納められていたが、児玉が私費で購入した図書類およびアイヌ民具資料などについては児玉家の居間や書斎などに納められており、そのうちの一部が北大に貸し出されている形であったという<sup>xxiv</sup>。これによれば当初の児玉コレクションは、前述の広義の児玉コレクション（児玉収集の全物質文化資料）とも狭義の児玉コレクション（児玉の私費購入資料）とも一致しておらず、ただ「児玉コレクション」という用語だけが一人歩きしたものであるように見える。



児玉コレクション模式図

## 3-1-4. 児玉コレクションという用語の混乱

ではなぜこのような児玉コレクションという用語に齟齬が見られるのであろうか。これは当時の資料の管理体制もあるだろうが、北大と児玉家の間での複数回にわたる資料の出し入れが大きな原因であると考えられる。

1959(昭和34)年に児玉は北大を定年退官するが、児玉自身は名誉教授として北大に籍を残し、標本室の資料もそのまま残されたという。しかし1963(昭和38)年頃に標本室の改築があり、その時に児玉家から貸し出していた資料<sup>xxv</sup>は業者を使って児玉家へ引き揚げ、児玉家では敷地内に蔵を増築して資料収納に対応したという。また、1968(昭和43)年には医学部が新築されて標本室も新しくなり、これにともない再度資料が児玉家から貸し出され、1970(昭和45)年の児玉死亡後に資料は児玉の研究室のものとともに児玉家へ返却されたとのことである<sup>xxvi</sup>。これら度重なる資料の出し入れによって児玉の個人資料と北大の資料が同一視され、資料の混同が生じるとともに「児玉コレクション」という用語の定義が曖昧化される原因となったのではないかと考えられる。



標本庫内に展示された、木札が付けられた資料  
【1963年撮影、児玉家所蔵】

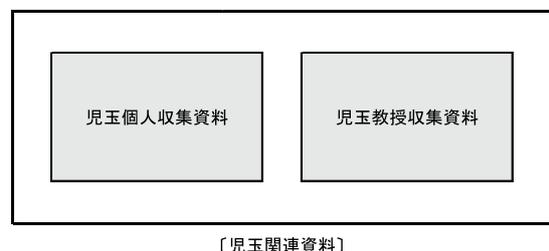


児玉家の蔵の中の様子 (1980年撮影)  
【函館博物館所蔵】

## 3-1-5. 児玉コレクションの定義づけ

前述のような定義の曖昧化を踏まえ、児玉コレクションについて考察する際には、改めてその定義を設定する必要があると考える。

児玉が北大教授として収集した資料については、児玉の私物ではない以上「児玉コレクション」と表現するのはやや適切さに欠けることから、総体を「児玉関連資料」とした上で「児玉教授収集資料」と表現した方が適切であろう。そしてこれに対して児玉が個人的に私費で収集した資料については、これまでの用語の混同などを勘案して、「児玉個人収集資料」とするのが誤解のない表現となると考えられるため、本稿では以下この定義に則って進めていくこととしたい。



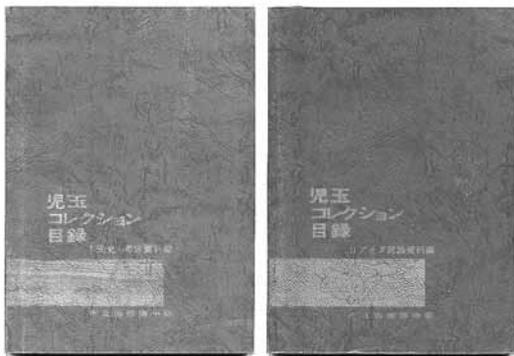
「児玉関連資料」模式図

### 3-2. 刊行物等で存在が確認される児玉関連資料

#### 3-2-1. 児玉関連資料の総体

児玉関連資料については、現時点で函館博物館・アイヌ民族博物館・北大で所蔵されていることがわかっている。そのうち児玉個人収集資料については、考古資料7,157件、民族資料5,105件の合計12,262件が、また児玉教授収集資料については1,014体分の人骨が刊行物に掲載されている<sup>xxvii</sup>。しかし児玉関連資料の総体については、刊行物に掲載されていない資料もあるため、未だに確実なことはわかっておらず、「先史・考古資料約7,200件、アイヌを主とする民族資料、文献記録資料約7,000件を数える」【長谷部2000:122】とするものもあれば、「(児玉関連資料の)総数は、5,000点をはるかに超える」(括弧内は筆者)【秋野1999:2】としているものもあるなど、きわめて不明確な状態である。

#### 3-2-2. 函館博物館所蔵資料



児玉コレクション目録 I および II

函館博物館は1998(平成10)年および2010(平成22)年、2016(平成28)年に児玉個人収集資料の寄贈を受けており、このうち1998(平成10)年に寄贈された考古資料7,157件、民族資料2,792件については1983(昭和58)年と1987(昭和62)年に資料目録が刊行され

ている<sup>xxviii</sup>。

考古資料については、自らが発掘調査を行ったモヨロ貝塚やサイベ沢遺跡などの出土資料のほか<sup>xxix</sup>、自らの興味で骨董屋などをおして購入した東北地方の亀ヶ岡式土器および土製品など、また児玉自身興味はなかったが骨董屋でアイヌ資料と抱き合わせて販売されたという<sup>xxx</sup>本州出土の土器や瓦などで構成される。

民族資料については、「着る・装う」関連資料1,278件、「賄う」関連資料70件、「住まう」関連資料6件、「切る・作る・搗く・篩う」関連資料13件、「祈る・祭る」関連資料1,348件、「葬る」関連資料18件、「嗜む」関連資料59件となっており、衣服や装身具などの「着る・装う」および捧酒箸などの「祈る・祭る」関連資料が突出している反面、狩猟具などの「生業」関連資料がほとんど見られない。

また、目録で確認することができない資料も所蔵しており、それらについては寄贈経緯などと合わせて後段で詳述する。

#### 3-2-3. アイヌ民族博物館所蔵資料



児玉資料目録 I および II

アイヌ民族博物館は、1981(昭和56)年および1984(昭和59)年に合わせて2,313件の児玉個人収集資料が寄託され、函館博物館同様2冊の目録が1989(平成元)年と1991(平成3)年に刊行されている。その後、こ

これらの資料は1998(平成10)年に2,271件が寄贈となった<sup>xxxi</sup>。

内訳は、「着る・装う」関連資料983件、「賄う」関連資料101件、「住まう」関連資料36件、「切る・作る・搗く・篩う」関連資料71件、「祈る・祭る」関連資料685件、「葬る」関連資料126件、「嗜む」関連資料16件、「生業」関連資料252件、その他1件となっており、全体的にバランスのとれた収蔵状況である。中でも函館博物館寄贈資料に含まれていない狩猟具などの「生業」関連資料や埋葬具などの「葬る」関連資料が多くみられることが特徴的である。

#### 3-2-4. 北大所蔵資料



北大の調査報告書 (2013年刊)

児玉が1929(昭和4)年から1959(昭和34)年まで在籍した北大には、言うまでもなく多くの児玉関連資料が収蔵されている。北大医学部で保管されている人骨やそれに付随する副葬品などがそれに当たる。

北大所蔵資料のうち人骨と副葬品は特に1980年代以降強く批判され<sup>xxxii</sup>、資料管理状況の整備や収集の経緯についての調査が行われるようになる。特に近年、先住民族への遺骨および副葬品の返還は世界的に最も解決すべき問題の一つとされ、北大では

2013(平成25)年にそれまでの調査結果を『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』として刊行し、1,014体の人骨とその収集・保管経緯に関する情報を公開した。現在も遺骨・副葬品の調査を行っている<sup>xxxiii</sup>。

#### 3-2-5. 児玉家所蔵資料

児玉家が所蔵する資料は、児玉の長女である児玉マリ氏が所有するアイヌの服飾品をはじめとした民具資料およびその他関係資料(文書資料・美術資料・児玉遺稿・写真資料など)と、札幌市の旧児玉邸に残されていた児玉の研究資料(文書・考古資料・書籍など)などである。

前者のアイヌの民具資料は2002(平成14)年に函館博物館に寄託され、その他資料は寄贈を前提とした「預かり」という形で函館市北方民族資料館で保管され、寄贈に向けた整理が進められている。その他の資料の中には、児玉のライフヒストリーの項で提示したような、児玉の研究活動を知る上で貴重なものも含まれている。また、旧児玉邸に残された資料についても児玉の研究活動を知る上で貴重な資料が含まれており、その他資料と同じく寄贈を前提とした「預かり」という形で函館市北方民族資料館で保管されている。

#### 4. 児玉個人収集資料の寄託・寄贈

前項において、研究者などそれぞれの立場で異なった把握のされ方がなされていた「児玉関連資料」(児玉コレクション)について、「児玉個人収集資料」と「児玉教授収集資料」に分けることが妥当であることを提示したが、これらの内児玉家に残された児玉個人収集資料が児玉の死後どのようにして分散していったかについてはこれまで明らかにはされていない。

本項では、児玉の死後児玉個人収集資料

がどのようにして遺族の下から分散し、函館博物館へ寄託・寄贈されていったかについて述べることにする。

#### 4-1. 函館と児玉関連資料のつながり

##### 4-1-1. 函館博物館と児玉作左衛門

従来「児玉コレクション」の函館博物館入りに関しては、結果論として幼少時を函館で過ごした児玉と函館の縁を取り上げることが多かったが【長谷部2000など】、実際の資料寄託・寄贈に関する事務的折衝については触れられることはなかった。函館博物館と児玉の関係については、幼少時の児玉が函館博物館を訪れていても無論おかしくはないのだが、こと児玉個人収集資料の寄託に関しては、児玉と函館博物館学芸員姫野英夫との交流を抜きに語ることはできない。

児玉マリ氏によると、児玉は研究をとおして姫野と個人的な付き合いもしており、姫野はしばしば札幌の児玉邸に顔を出していたという。そして訪問時は約束無しで突然現れるのであるが、児玉のお気に入りであったカールレイモンのハム・ソーセージを必ず手土産として持ってきていたとのことであった。

児玉の死後、姫野は久しく児玉邸を訪れていなかったが、1979(昭和54)年5～6月に函館博物館で開催された企画展「博物館100年の歩み」の関係で同年4月頃に北大附属博物館を訪れた際、北大医学部におかれていた児玉関連資料が遺族の元に戻されたが、あまりに膨大な量であるために遺族も手をつけられないでいるとの話を聞いた。事の重大性を認識した姫野はすぐに児玉の遺族を訪ねて資料の寄贈について打診し、遺族から寄贈の条件として「資料の一括収蔵」「目録の刊行」などを提示され、博物館に戻っている。ここから函館と児玉個人収集資料との実質的なつながりがはじ

まるのである。

##### 4-1-2. 児玉の遺族と函館市との交渉

1980(昭和55)年2月18日、札幌の児玉邸において遺族と函館市の交渉が行われた。このとき遺族側は児玉とみ夫人ならびに長女マリ氏および四男譲次氏とともに北海道新聞社の渋谷四郎氏が同席し、函館市側は三ツ谷毅一教育長ならびに佐藤健治社会教育課長とともに児玉の函館中学校時代の同級生である函館空港ビル社長の田中誠一郎氏が同席している（いずれも当時）。



1980年3月13日付北海道新聞  
【函館博物館所蔵】

この交渉では遺族から「資料を道内で保存すること」「研究に必要な際には資料をいつでも手に取ってみることができるようにすること」「資料の貸し出しを遺族の意向でもできるようにすること」などの具体

的な条件提示があり、これに対して函館市側からは「遺族の意向を最大限反映するために寄託の形式を取ること」「資料の点数確認などに学芸員を派遣すること」などが提案されている。そしてこの交渉を経て遺族は資料の函館博物館への寄託を決め、3月には共同通信社をはじめとした複数のメディアが大々的に「児玉コレクションの函館入り」を報じたのである。なお、児玉コレクションの函館入りに尽力した姫野学芸員は、お礼の挨拶に児玉家を訪ねた後札幌市内の宿泊先で客死しており、訃報に接した児玉家はその死を悼んだという。

#### 4-2. 函館博物館への寄託・寄贈

##### 4-2-1. 第一次寄託（昭和55年度）

1980(昭和55)年5月19日に函館市長を表敬訪問した遺族は、矢野康市長（当時）から児玉コレクションを「総合文化センター」（当時建設予定）に展示するプランを提示されたことを受け、同年8月1日付で「児玉コレクション」約7,930点について遺族の連名で寄託申し込みを行った<sup>xxxiv</sup>。函館市は同月6～7日に社会教育課長とともに博物館学芸員2名を児玉家へ派遣して資料の確認を行い、同年10月3日付で受託決裁となった。

その膨大さから、資料の博物館への移送は1981(昭和56)年1月と同年11月の2回に分けて行うこととなり、1回目は1月10～15日に学芸員が児玉家で立ち会って梱包・発送して同月18日に函館博物館で搬入・開梱が行われた。この際には土器および石器が優先的に移送されており、このことについて児玉マリ氏は「当時札幌の地下で東豊線開通工事が行われることになり、児玉邸はその直上にあったため、壊れやすい土器を優先的に送るように頼んだ」としている。また、2回目は同年11月10～14日に学芸員が児玉家で立ち会って民族資料

を中心に梱包・発送して同月17日に函館博物館で搬入・開梱が行われている。一連の受け入れに際しては資料1件ずつ検品したうえでリストが作成され、総件数6,051件と確定した。



児玉家からの搬出時の様子（1981年撮影）  
【函館博物館所蔵】

1980(昭和55)年の児玉個人収集資料寄託後、函館市の財政難から総合文化センター建設計画が頓挫し、寄託資料はしばし「死蔵」の憂き目に遭う。1986(昭和61)年9月18日付北海道新聞では「眠らすの？児玉コレクション／遺族と約束、専用展示場／財政難でメド立たず」など、整理が完了してもなお公開の目処の立たない現状が報じられた。そのような中で、市内末広町の旧日本銀行函館支店建物を活用した展示施設が計画され、1989(平成元)年11月に「函館市北方民族資料・石川啄木資料館」が開館することで、ようやく寄託資料が日の目を見ることとなったのである。

##### 第一次寄託申込(1980年8月1日付)

資料名	数量	備考
考古資料	約2,300点	
民俗資料（衣服等）	約340点	
民俗資料（首飾等）	約1,000点	
民俗資料（ヒゲベラ）	約1,380点	
民俗資料（木彫類）	約100点	
民俗資料（刀物類）	約400点	
民俗資料（キセル）	約100点	
民俗資料（その他）	約810点	
書籍・図面類	約1,500点	
合計	約7,930点	

## 第一次寄託受入時確認

資料名	数量	備考
先史考古資料	3,242件	1981年1月18日検
アイヌ民族資料	2,791件	1981年11月17日検
先史考古資料	18件	1981年11月17日検
合計	6,051件	

## 第二次寄託受入時確認

資料名	数量	備考
(黒版)	342件	1994年3月6～9日検
(赤版)	407件	1994年3月6～9日検
合計	749件	

## 4-2-2. 第二次寄託（平成5年度）

函館市北方民族資料・石川啄木資料館が1993(平成5)年4月に「函館市北方民族資料館」単独館（以下「北方民族資料館」）としてリニューアルオープンするにあたって<sup>xxxv</sup>、函館市は遺族に展示資料充実のための所蔵資料貸し出し・寄託を依頼し、1994(平成6)年2月1日付で2回目の「児玉コレクション」寄託の運びとなった。寄託申し込み資料は札幌で保管されていた資料1,254件と白老で保管されていた資料372件の合計1,626件であり、2000(平成12)年10月2日までの期限付き寄託である。この申し込みは同年3月2日付で受託決裁となり、函館博物館学芸員および北方民族資料館学芸員の計2名が同月6～9日に札幌と白老で資料確認を行い、同月10～16日に資料を北方民族資料館に搬入・開梱した。これらの第二次寄託資料は受入の際の資料確認で749件（点数については曖昧）と確定された<sup>xxxvi</sup>。

## 第二次寄託申込(1994年2月1日付)

資料名	数量	備考
埋葬具	21件	白老搬出
儀礼用具	50件	白老搬出
調度用具	300件	白老搬出
屏風	1件	白老搬出
信仰・儀礼用具	235件	札幌搬出
調度用具	98件	札幌搬出
調理・加工用具	22件	札幌搬出
装身具	133件	札幌搬出
運搬具	40件	札幌搬出
狩猟用具	57件	札幌搬出
資料模型等	5件	札幌搬出
千島発掘資料	500件	札幌搬出
樺太発掘資料	66件	札幌搬出
北海道発掘資料	98件	札幌搬出
合計	1,626件	



児玉家での検品・梱包の様子  
【函館博物館所蔵】

## 4-2-3. 第三次寄託（平成6年度）

1994(平成6)年8月30日、前回と同様遺族から3回目の資料寄託の申し込みがあった。資料は「アイヌの墓標ほか」20件であり、第二次寄託と同じく2000(平成12)年10月2日までの期限付き寄託である。この申し込みは9月1日付で受託決裁となり、北方民族資料館に搬入されたが、この際の具体的なやりとりや資料の移送などについては記録が残っておらず、どのような経過で申し込みや受入がなされたものであるかは現時点では判然としない。

これらの第三次寄託資料は受入の際の資料確認で20件（点数については記載なし）と確定されている。

## 第三次寄託申込(1994年8月30日付)・受入時確認

資料名	数量	備考
葬儀用キナ	2件	
墓標	17件	
調理具	1件	
合計	20件	

## 4-2-4. 第一次寄贈（平成10年度）

1998(平成10)年11月17日、遺族からはじめて資料の寄贈の申し込みがあった。この寄贈は、これまでの第一～三次寄託資料を寄贈に切り替えるとともに、24件188点の民族資料と3件4点の考古資料の合計27件192点を追加で寄贈するというものである。結果、総数11,781件（点数については曖昧）の児玉個人収集資料が寄贈されることとなり（受入番号H10-51）、児玉個人収集資料の大部分が函館博物館で所蔵されることになったといえる。



1999年1月14日の感謝状贈呈式  
【児玉家所蔵】

## 第一次寄贈申込(1998年11月17日付)

資料名	件数	備考
先史・考古関係資料	7,161件	
アイヌ民族関係資料	4,603件	
ウイльта民族関係資料	17件	
合計	11,781件	

## 第一次寄贈受入時確認

資料名	件数	備考
先史・考古資料	7,157件	第一次寄託資料
アイヌ民族資料	2,786件	第一次寄託資料
埋葬具	21件	第二次寄託資料
信仰・儀礼用具	285件	第二次寄託資料
調度用具	398件	第二次寄託資料
調理・加工用具	22件	第二次寄託資料
装身具	133件	第二次寄託資料
運搬具	40件	第二次寄託資料
狩猟用具	57件	第二次寄託資料
資料模型等	5件	第二次寄託資料
千島発掘資料	500件	第二次寄託資料
樺太発掘資料	66件	第二次寄託資料
北海道発掘資料	98件	第二次寄託資料
屏風	1件	第二次寄託資料
葬儀用キナ	2件	第三次寄託資料
墓標	17件	第三次寄託資料
調理具	1件	第三次寄託資料
刀掛帯	8件	
捧酒篋	7件	
刀柄	60件	
盆	1件	
家模型	1件	
衣服	11件	
首飾り	27件	
莫産編み機	1件	
織機	22件	
材料（糸玉）	3件	
死者用靴	2件	
紐・帯	19件	
木綿衣	2件	アイヌ民族博物館より
まじない用木刀	2件	アイヌ民族博物館より
まじない用矢筒	2件	アイヌ民族博物館より
小刀	3件	アイヌ民族博物館より
樺皮製容器（ウイльта）	1件	アイヌ民族博物館より
財布（ウイльта）	5件	アイヌ民族博物館より
巾着（ウイльта）	2件	アイヌ民族博物館より
皿敷（ウイльта）	2件	アイヌ民族博物館より
敷物（ウイльта）	1件	アイヌ民族博物館より
首飾り（ウイльта）	1件	アイヌ民族博物館より
トナカイ木偶（ウイльта）	1件	アイヌ民族博物館より
木偶（ウイльта）	4件	
骨偶（モヨロ）	2件	
帯飾り（モヨロ）	1件	
耳飾り（モヨロ）	1件	
合計	11,781件	

## 4-2-5. 第四次寄託（平成13年度）

2002(平成14)年2月22日、遺族から「首飾りほか」の寄託申し込みがあり、同年3月7日付で受託決裁となった。これらは、これまで遺族が個人研究用に手元に置いておいた服飾関係資料をはじめとする民具資料等452件（点数は曖昧である）であり、これまでの寄託資料は寄託期限が設けられ

ていたが、今回の寄託については寄託期限は設定されなかった。

寄託資料は同年函館博物館の学芸員2名立ち会いの下で白老町から搬出され、北方民族資料館に搬入・開梱された。当寄託資料は、寄託者の研究内容を反映して華麗な服飾資料や服飾生産用具、またそれらに関連する絵巻物などで占められており、アイヌの服飾研究における基礎資料となるものであると評価される。

第四次寄託申込(2002年2月22日付)・受入時確認

資料名	数量	備考
首飾りほか	452件	
合計	452件	

4-2-6. 第二次寄贈(平成22年度)

2010(平成22)年8月26日、遺族から「児玉作左衛門旧蔵図書」と「DDT噴霧器」の寄贈申し込みがあり、同日付で受贈決裁となった。このうち特に前者は児玉が自らの研究に用いた学術図書類であり、その内容も民族・考古・美術・医学・歴史・宗教など極めて多岐にわたっており、児玉作左衛門の研究活動を検証するのに適した好素材であると評価される。



整理が終わり、配架された旧蔵図書  
【2010年8月撮影】

当該資料は旧児玉邸に残されていたものであるが、「一般の書籍とは異なり、学術的価値が高く書籍そのものが博物館資料となる」<sup>xxxvii</sup>として、2003(平成15)年に北方民族

資料館郷土資料室に持ち込まれていたものである。これらは後述する2009(平成21)年以降の集中的整理において整理が進められ、受入手続がなされた。

第二次寄贈申込(2010年8月26日付)・受入時確認

資料名	数量	備考
児玉作左衛門旧蔵図書	4,441件6,003点	2003年預かり
DDT噴霧器	1件1点	2003年預かり
合計	4,442件6,004点	

4-2-7. 第三次寄贈(平成28年度)

2014(平成26)年、遺族から旧児玉邸の母屋を取り壊すとの連絡を受けたことから、函館博物館学芸員が旧邸内で調査を行い、遺族との調整ができた児玉個人収集資料7件1,773点について2016(平成28)年11月1日付で寄贈申込され、同月4日付で受入決裁となった。これらの資料は児玉が購入した履歴のある考古資料や、その他の研究資料などで構成されている。



2014年末に取り壊された旧児玉邸母屋  
【2014年9月撮影】

第三次寄贈申込(2016年11月1日付)・受入時確認

資料名	数量	備考
深鉢形土器	1件1点	
石器	1件1,732点	
ライヘルト顕微鏡	1件1点	
木彫り熊	2件2点	
アボリジニ音声資料	1件1点	
児童書	1件36点	
合計	7件1,773点	

#### 4-3. その他

上記のような経緯で函館博物館に寄託・寄贈された児玉個人収集資料であるが、これらのほかにも函館博物館で保管されているものが存在している。

まず1つ目が、1993(平成5)年の借用資料である。同年の北方民族資料館単独開館に先立ち、民族資料・美術資料・考古資料の合計11件22点を遺族から借用したものであり、借用期間を「北方民族資料館の展示終了まで」としている。この時借用となった資料の内、モヨロ貝塚出土遺物3件4点とウイルタ木偶1件4点の合計4件8点は第一次寄贈時に寄贈となり、アイヌ衣服1件1点と蝦夷絵1件1点の合計2件2点は第四次寄託時に寄託形式に移行となった。つまり現時点において「借用」扱いとなっているのは、これらを除いた5件12点である。

平成4年借用資料(1993年1月18日付)

資料名	数量	備考
蝦夷絵	1点	第四次寄託
露愛辞典	1点	
航海日誌・附図	2点	
三国通覧図説・附図	2点	
三国通覧図説・附図	6点	
蝦夷志	1点	
ピリカチキリイミ	1点	第四次寄託
骨偶	2点	第一次寄贈
帯飾り	1点	第一次寄贈
耳飾り	1点	第一次寄贈
木偶	4点	第一次寄贈
合計	11件22点	

次に2つ目が、第四次寄託資料とともに持ち込まれたものである。資料は古文書・書画・刀鏢など1,000件余りであり、金属製の長持や段ボール箱など16箱に分割して持ち込まれた。

次に3つ目が、2003(平成15)年に児玉作左衛門旧蔵図書とともに持ち込まれた、児玉作左衛門の手書き研究資料等800件余りである。

そして4つ目が、持ち込まれた時期や理

由が全く不明なものである。

これらはいずれも後述する2009(平成21)年以降実施の集中的な資料整理・調査においてその存在が再確認され、計数や撮影などが行われたものである。

#### 5. 児玉個人収集資料の調査・整理

本項では、児玉やその遺族が児玉個人収集資料をどのようにして管理し、また函館博物館に寄託・寄贈されてからはどのように調査・整理が進められていったかについて述べる。

なお本項では資料整理を、「資料1点ずつ計測・撮影・観察を行い、それらの情報を統合した資料カードを作成すること」と定義する。

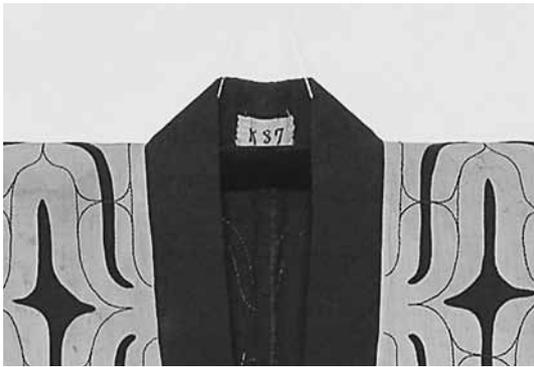
##### 5-1. 寄託・寄贈以前の児玉個人収集資料

##### 5-1-1. 存命中の児玉による資料管理(～1970年)

存命中の児玉が収集した児玉関連資料は児玉個人収集資料と児玉教授収集資料に分けられ、児玉教授収集資料については悉く北大の標本室に納められていたが、児玉が私費で購入した図書類およびアイヌ民具資料などの児玉個人収集資料についてはほとんどが児玉家の居間などに納められており、そのうちの一部分が北大に貸し出される形であったことはすでに述べたとおりである。この時期に児玉がどのようにして資料を管理していたかは詳しく知ることができないが、児玉教授収集資料については「アイヌ民族人体骨発掘台帳」<sup>xxxviii</sup>が残されているほか、児玉家から北大に貸し出されていた資料については、分別用の木札がつけられていたことがわかっている。

また、児玉の助手として主に服飾関係の研究を行っていた児玉マリ氏は、児玉個人収集資料のうちのアイヌ衣服について、分類番号<sup>xxxix</sup>を記入した5cm×3cmほどの布

片を衣服の内衿や衿えりに縫い付けている。さらに児玉マリ氏によると、児玉自身によって一部資料には資料名や入手先などを記入したタグがつけられていたほか、展覧会開催などのために貸し出される際には都度貸し出し番号を記入した円形のタグがつけられていたとのことであるが、概して児玉個人収集資料は総体を把握できるような管理がなされていないようである。



衿に縫い付けられた布片  
【児玉マリ氏所蔵 函館博物館寄託資料】

#### 5-1-2. 遺族による資料管理（～1980年頃）

児玉家に残された資料の管理・整理の経緯については児玉マ1989に詳述されており、以下に引用する。

父は資料をお貸しする時には、その都度仮番号をつけておりました。ただ衣服についてだけ母と私で寸法をとり、文様や生地などで分類をして番号を付けておりました。その他の資料については、現在北海学園大学の藤村さんや、その後ここに勤められた岡田さん、設計のお仕事をしていらっしゃる加藤さんたちがお仕事の終わった夜や、お休みの日などに、一個一個番号をつけてくださいました。衣類だけは一応済ませてありましたが、その他の物が大変でした。木工品、漆器類、刀や耳輪等の金工品など、白いエナメルで目立たない場所に番号が消えないように、そして小さく書くのですから苦勞していらっしゃる

ました。番号をつけながらも、変わった物があったりすると仕事が中断してしまうこともありました。ですから苦勞と共に楽しい議論もずい分ありました。資料については前にも書きましたが、殆どが骨董屋から入手したもので出所の判明しないものが多いのです。父が歩いた場所で手に入ったものは、数が少ないのですが、小さなラベルがついていました。

遺族と関係者による整理は、遺族によってすでに整理されていた「衣服」から始められ、その後首飾り→木製品（捧酒箸含む）→小刀→喫煙具→木幣・幣冠→耳飾り・鉢巻など→模型→漆器→刀といった順番で進められた<sup>xi</sup>。このような整理が4～5年ほど続けられたことである程度整理が進んだが、その量のあまりの膨大さから、やはり全ての資料を整理しきることはできなかったという<sup>xii</sup>。



盆の裏に註記された通し番号

#### 5-2. 函館に寄託・寄贈された資料の整理

##### 5-2-1. 第一次資料寄託時（1981～1987年）

1980(昭和55)年10月3日付で第一次寄託資料が函館博物館に受け入れられたのち、寄託時の条件（「資料全部の目録が完成し、展示が可能となったときは、寄贈となるようにします。」）により、同館内にて資料整理および資料目録刊行が正式に計画される。

搬入された資料は破損状況などのチェッ

クが為され、正確な計数によって「受入台帳」が作成された上で、目録刊行のための整理がスタートした。

当初は特別研究員として毎月1回札幌から招聘された児玉マリ氏と函館博物館民族分野担当学芸員1名、そして臨時職員2名の合計4名体制で昭和55年度から昭和60年度までの6カ年計画がたてられるが、最終的に整理が完了して「先史・考古資料編」および「アイヌ民族資料編」の2冊の『児玉コレクション目録』の刊行が完了したのは1987(昭和62)年のことであった(「先史・考古資料編」は1983(昭和58)年刊行)。結果として7年の月日を費やす一大整理事業となったのである。これらの整理によって第一次寄託資料は、考古資料7,157件7,907点および民族資料2,792件3,074点であることが確定した<sup>xlii</sup>。



博物館第5研究室での資料整理の様子  
【函館博物館所蔵】



このときに作成された考古資料の資料カード  
(一部加工)

	昭和55年度	昭和56年度	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度
1 資料の受入	考古資料 (搬入) (状況確認)	民族資料 (搬入) (状況確認) (受入台帳作成)					
2 資料の整理		考古資料整理 (資料調査) (補修)	考古資料 (註記)	民族資料 (資料調査) (資料分類)	民族資料 (註記) (補修)		
3 資料カード作成		考古資料 (採寸・撮影) (登録台帳作成)	考古資料 (採寸・撮影) (登録台帳作成)	民族資料 (整理記録記入)	民族資料 (採寸・撮影) (登録台帳作成)	民族資料 (採寸・撮影) (登録台帳作成)	民族資料 (総点検)
4 目録の作成			考古資料 (原稿編集) (校正)				民族資料 (原稿編集) (校正)
5 備考			S58.3.20 『児玉コレクション目録Ⅰ先史考古資料編』発行				S62.2.24 『児玉コレクション目録Ⅱアイヌ民族資料編』発行

第一次寄託資料の整理行程

### 5-2-2. 第二次資料寄託時 (1994~1998年)

1994(平成6)年3月2日付で受け入れ決裁となった第二次寄託資料が、同月北方民族資料館に搬入された。これら資料の整理については、受入確認された資料リスト(受入台帳)が同年4月11日付でワープロ出力されていることと、1995(平成7)年4月4

日付で1998(平成10)年度までの整理計画が立てられていることがわかっている。整理計画では函館博物館民族分野担当学芸員1名と特別研究員1名の合計2名体制となっており、資料整理完了後の「目録の刊行」までは策定されていない。

	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度
1 資料の受入	第二次寄託 (搬入) (状況確認)					
2 資料の整理		受入台帳整備 基礎データ作成	資料の区分・分類 資料の実態調査	仮台帳作成 資料ラベル作成		
3 資料カード作成					資料カード計測等 記入・作成	資料写真撮影 資料カード貼付 資料収納 資料最終点検
4 目録の作成						
5 備考		H6.4.11 受入確認リスト出力				

第二次寄託資料の整理行程（1995年4月4日時点）

### 5-2-3. 北方民族資料館での整理・調査(2005～2008年)

北方民族資料館で函館博物館所蔵児玉個人収集資料に関する企画展の開催が計画され、そのための資料整理・調査が2005(平成17)年度から北方民族資料館学芸員1名体制で実施された。整理・調査に際しては函館博物館特別研究員1名が立会・補助し、特別研究員である児玉マリ氏の専門分野である服飾資料の現状確認・計測・撮影・データ化が行われた。



2006年の企画展で展示解説する児玉マリ氏  
【函館博物館所蔵】

これらの整理・調査の成果は2006(平成18)年7月15日～9月18日に同館で開催された企画展「華麗なアイヌ衣裳の世界～児玉コレクション」においてまず公開され、児玉マリ氏は同時に刊行された展示図録『華麗なアイヌ衣裳の世界～児玉コレクション』の監修も手がけるとともに、同年7月22日に開催された講演会「ミュージアムトーク 華麗なアイヌ衣裳の世界～児玉コレクションを語る」の講師も務めた。

また、翌2007(平成19)年7月7日～9月24日には次に整理・調査が完了した装飾品を対象に「タマサイの美～アイヌ女性の魂」と題した企画展が開催された。前年度と同様、展示図録『タマサイの美～函館コレクション～』も同時に刊行され、児玉マリ氏はその監修も手がけている。

### 5-2-4. 総整理事業（2009年～）

在函館児玉個人収集資料の総体と詳細を把握するため、2009(平成21)年から在函館児玉個人収集資料の総整理事業を開始した。整理作業には、2009～2010(平成21～22)年度は函館博物館民族分野担当学芸員1名・特別研究員1名・臨時職員2名に北方民族資料館学芸員1名の合計5名が、そして2011(平成23)年度は函館博物館民族分野担当学芸員1名と北方民族資料館学芸員1名の合計2名が、2012(平成24)年度以降は函館博物館民族分野担当学芸員1名があたった<sup>xiii</sup>。また整理手順としては以下のように実施した。

- ① 博物館の過去の資料寄託・寄贈受入台帳等から児玉個人収集資料に関するものを探し出し、それに添付された資料

リストをエクセル入力して、現状での在函館児玉個人収集資料のデータベースを作成する。

- ② 2005～2008(平成17～20)年に北方民族資料館で蓄積されていた整理・調査済み資料のデータを、上記データベースに統合する。
- ③ 北方民族資料館収蔵庫の棚に棚番号を付け、棚にある資料を1点ずつ確認して計測・撮影を行うとともに、その所在を含む資料情報をデータベースに追記していく。
- ④ 所在確認および整理が完了したものについて資料カードを作成する。

まず上記①の作業によって本稿4「児玉個人収集資料の寄託・寄贈」において述べた内容が把握されたことにより資料整理の

優先度および着手順が確定し、これにより第二～第四次寄託資料を学芸員と特別研究員の3名が整理・調査しながら、同時に臨時職員2名が2003(平成15)年に持ち込まれた児玉家所蔵資料のうち刊行図書類の清拭・配架・リスト作成を行った<sup>xiv</sup>。預かり資料の再確認等作業進捗に伴って作業量がふえることもあったが、基本的には計画通りに資料整理は進められ、現時点で在函館児玉個人収集資料は寄贈資料15,785件21,251点、寄託資料587件662点、借用資料5件12点と把握された。

なお、当初は2016(平成28)年度末には新たな目録の刊行を目指していたが、再整理が必要な資料の存在が把握されたり、預かり資料の処遇について継続的な検討を必要とする事案が確認されたりするなどした為、まだその目的を達成できていない。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
児玉コレクション 第二次寄託資料	服飾関係資料の調査 服飾生産用具の調査		資料状況確認 資料計測 写真撮影 データ入力・整理 資料台帳作成				図録発行用データ整理作業他	『児玉コレクション 目録Ⅲ』続・民族 資料編(仮) 『児玉コレクション 目録Ⅳ』研究資 料編(仮) 発行
児玉コレクション 第三次寄託資料								
児玉コレクション 第一次寄贈資料 ※第一～三次寄託資料除く			資料状況確認	資料計測 写真撮影 データ入力・整理 資料台帳作成				
児玉コレクション 第四次寄託資料								
児玉作左衛門旧蔵図書 第二次寄贈資料	資料燻蒸 資料清拭 資料配架 データ入力	データ入力・整理 寄附採納手続 資料台帳作成						
預かり資料				資料状況確認 資料清拭 データ入力 仮台帳作成	データ整理 資料取扱検討 資料台帳作成			

総整理事業の行程 (2012年10月1日時点)

おわりに

本稿では児玉作左衛門のライフヒストリーを概観したうえでいわゆる「児玉コレクション」の成り立ちと構成について考察し、それらが函館へ寄託・寄贈されていたのちに整理・調査が行われた経過について総括したものである。

「児玉作左衛門のライフヒストリー」の項では、これまで広く認識されてきた児玉

作左衛門の出自や函館に移住してきた経緯、そして児玉の研究と児玉関連資料の形成がリンクしていることなどについて、新たな知見を提示することができた。特にこれまで全く知られていなかった民具購入に係る領収書の存在など、児玉関連資料の学術的な位置づけを明確にするためにこの上ない資料もある程度確認・整理することができたことは大きい。

「児玉コレクションの成り立ちと構成」の項では、これまで研究者それぞれの立場で異なった把握のされ方がなされていた「児玉コレクション」という一見得体の知れない存在について、その成り立ちからひもとくことで、児玉個人収集資料と児玉教授収集資料とによって形成される「児玉関連資料」の存在を定義するに至り、それぞれが異なる調査・分析および評価をされるべきであることが見えてきた。これはとりもなおさず児玉に対する評価にも共通することであり、改めて児玉自身に関する研究の重要性を明らかにしたものといえよう。

「児玉個人収集資料の寄託・寄贈」および「児玉個人収集資料の調査・整理」の項では、函館博物館による児玉個人収集資料の寄託・寄贈受入から整理・調査までを通時的に概観し、これにより在函館児玉個人収集資料の全容をある程度明らかにすることができた。今後、函館博物館が預かっている遺族所蔵資料の整理・受入が進み、それらとアイヌ民族博物館や北大が所蔵する児玉関連資料の情報を統合することにより、児玉の研究活動をより詳細に把握することができるようになって考えられる。

ただし函館博物館の児玉個人収集資料受入や管理の経過についてはまだ把握しきれていないことも多く、これらについてはより広範な関係者への聞き取り調査などを今後も継続的に実施していくことで、明らかにしていくよう努めることが必要であると考える。

なお本稿は、2011(平成23)年から2013(平成25)年に実施された「アイヌ民族資料調査研究事業」および2014(平成26)年に実施された「博物館資料調査研究事業」の成果を総括したものである。

## 謝辞

以下の個人ならびに諸機関においては、調査に際してひとかたならぬご協力を頂いた。よって、ここに記して謝意を表すこととしたい。(敬称略・五十音順)

加藤博文(北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授)

児玉健(児玉作左衛門遺族)

児玉譲次(児玉作左衛門遺族、北海道大学名誉教授)

児玉マリ(児玉作左衛門遺族、元市立函館博物館特別研究員)

野村祐一(函館市教育委員会文化財課主査、元市立函館博物館学芸員、元函館市北方民族資料館学芸員)

長谷部一弘(函館市北方民族資料館学芸員、元市立函館博物館学芸員)

藤井安正(元鹿角市教育委員会学芸員)

逸見勝亮(北海道大学大学文書館研究員)

村木美幸(一般財団法人アイヌ民族博物館専務理事)

鹿角市教育委員会

鹿角市先人顕彰館

一般財団法人アイヌ民族博物館

函館市北方民族資料館

北海道大学

(市立函館博物館 学芸員)

## (参考文献)

秋野茂樹 1999「故児玉作左衛門博士収集アイヌ民具資料「児玉コレクション」の受贈並びに同資料の調査について」『アイヌ民族博物館だより』41:p.2,財団法人アイヌ民族博物館;白老町

伊藤昌一 1971「故児玉作左衛門先生 1895~1970」『解剖学雑誌』46(2):pp.143-144,日本解剖学会;東京

伊藤昌一 1974「解剖学第一・二講座」『北大医学部五十年史』,北海道大学医学部創立五十周年

- 記念会館建設期成会;札幌市
- 植木哲也 2008 『学問の暴力ーアイヌ墓地はなぜあばかれたかー』, 春風社;横浜市
- 岡田健蔵 1941 「兄玉博士とその回顧」(岡田健蔵 1969 『函館図書館創立60年記念 岡田健蔵先生論集』 pp.214-217, 図書裡会;函館市 所収)
- 萱野茂 1977 『炎の馬』, すずさわ書店;東京
- 久保熊吉 1915 『大正四年現在函館土地台帳』, 函館地主協会;函館
- 兄玉作左衛門 1936 「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』1:pp.1-41, 北海道帝国大学医学部解剖学教室;札幌市
- 兄玉作左衛門 1939 「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」『北方文化研究報告』1:pp.1-91, 北海道帝国大学北方文化研究室;札幌市
- 兄玉作左衛門 1948 『モヨロ貝塚』, 北海道原始文化研究会;札幌市
- 兄玉作左衛門 1959 「ドクロとともに／アイヌ研究の三十年」, 1959年3月16日付北海道新聞
- 兄玉作左衛門 1969 「緊急を要したアイヌ研究ー私のあゆんだ道」『からだの科学』26:pp.7-13, 日本評論社;東京都
- 兄玉作左衛門 1970 『Ainu historical and anthropological studies』, Hokkaido University;Sapporo city
- 兄玉作左衛門・大場利夫 1955 「網走市大曲洞窟出土の遺物について」『北方文化研究報告』10:pp.83-148, 北海道大学;札幌市
- 兄玉讓次編 1997 『兄玉作左衛門先生生誕百年記念誌』, 北海道大学医学部解剖学第二講座兄玉会;札幌市
- 兄玉とみ 1967 「樺太アイヌの首飾りについて」『北海道の文化』11:pp.43-55, 北海道文化財保護協会;札幌市
- 兄玉とみ 1968 「アイヌ首飾りの飾り板(シトキ)の研究ー前編・アイヌ自製のシトキー」『北海道の文化』15:pp.3-21, 北海道文化財保護協会;札幌市
- 兄玉とみ 1969 「アイヌ首飾りの飾り板(シトキ)の研究ー中編・アイヌが使用した外来品のシトキー」『北海道の文化』17, 北海道文化財保護協会;札幌市
- 兄玉マリ 1967 「アツシ織機とその操作について」『北海道の文化』11:pp.18-42, 北海道文化財保護協会;札幌市
- 兄玉マリ 1967 「蝦夷島奇観の女夷の図について」『北海道の文化』13:pp.1-8, 北海道文化財保護協会;札幌市
- 兄玉マリ 1968 「アツシの語義とその種類について」『北海道の文化』15:pp.61-72, 北海道文化財保護協会;札幌市
- 兄玉マリ 1969 「アツシにつかうオヒョウの皮剥ぎと処理について」『北海道の文化』17, 北海道文化財保護協会;札幌市
- 兄玉マリ 1970 「アツシの材料、機織および仕立」『アイヌ民族誌 上』, 第一法規出版;東京
- 兄玉マリ 1971 「「イイ誕生日だったナ」の父の一言がー」『北海道の文化』21 pp.1-2, 北海道文化財保護協会;札幌市
- 兄玉マリ 1989 「父兄玉作左衛門とアイヌ資料」『兄玉資料目録Ⅰ』, 財団法人アイヌ民族博物館;白老町
- 国立大学法人北海道大学編 2013 『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』, 北海道大学;札幌市
- 財団法人アイヌ民族博物館編 1989 『兄玉資料目録Ⅰ』, 財団法人アイヌ民族博物館;白老町
- 財団法人アイヌ民族博物館編 1991 『兄玉資料目録Ⅱ』, 財団法人アイヌ民族博物館;白老町
- 財団法人アイヌ民族博物館編 2010 『財団法人アイヌ民族博物館略歴および概要』, 財団法人アイヌ民族博物館;白老町
- 一般財団法人アイヌ民族博物館編 2014 『アイヌ民族博物館開館30周年記念誌』, 一般財団法人アイヌ民族博物館;白老町
- 市立函館博物館編 1983 『兄玉コレクション目録Ⅰ 先史・考古資料編』, 市立函館博物館;函館市
- 市立函館博物館編 1987 『兄玉コレクション目録Ⅱ アイヌ民族資料編』, 市立函館博物館;函館市

- 青年乃鹿角社編 1922『新鹿角』, 青年乃鹿角社; 秋田県
- 高倉信一郎 1982「北方文化研究室顛末」『北大百年誌 通説』 pp.962-975, 北海道大学; 札幌市
- 田中美千裕 2009「Zurich大学病院におけるvon Monakowとその弟子達」『Journal of Neuro Endovascular Therapy』 3(2):pp.131-136, 特定非営利活動法人日本脳神経血管内治療学会; 東京都
- 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編 1997『日本眼科学会百周年記念誌』, 日本眼科学会; 東京
- 野村祐一 1999「函館におけるアイヌ民族資料について思うこと」『地域史研究はこだて』 30:pp.46-49, 函館市史編さん室; 函館市
- 函館市北方民族資料館編・児玉マリ監修 2006『華麗なアイヌ衣裳の世界～児玉コレクション～』, 財団法人函館市文化・スポーツ振興財団; 函館市
- 函館市北方民族資料館編・児玉マリ監修 2007『タマサイの美～函館コレクション～』, 財団法人函館市文化・スポーツ振興財団; 函館市
- 長谷部一弘 2000「北方文化と二つのコレクションー馬場コレクションと児玉コレクションについてー」『馬場・児玉コレクションにみる 北の民アイヌの世界』 pp.121-129, 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構; 札幌市
- 長谷部一弘 2007「函館とアイヌ資料コレクション」『平成18年度普及啓発セミナー報告集』 pp.81-86, 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構; 札幌市
- 長谷部一弘 2007「地方博物館の先駆け『函館博物館』ー収蔵資料の来歴と今後の活用ー」『北太平洋の文化（北方民族文化シンポジウム報告）』 pp.19-24, 財団法人北方文化振興協会; 網走市
- 長谷部一弘 2016「児玉コレクション」『北方民族資料館・ガイドーアイヌ文化・北方民族資料／函館コレクション』 p.108, 公益財団法人函館市文化・スポーツ振興財団; 函館市
- 東村岳史 2013「アイヌの頭蓋骨写真報道が意味するものー過去の「露頭」の発見と発掘ー」『国際開発研究フォーラム』 43:pp.1-16, 名古屋大学大学院国際開発研究科; 名古屋市
- 渡辺文子 2002「北方民族資料館13年の歩みー現状と今後の課題ー」『市立函館博物館研究紀要』 12:pp.9-24, 市立函館博物館; 函館市
- 1960年12月18日付北海道新聞「研究三十余年の成果／アイヌ標本室児玉博士」
- 1961年10月24日付朝日新聞夕刊「脚光浴びる北大・アイヌ標本庫／一千点に達した頭骨／三十年注いだ児玉博士」
- 1982年10月10日付北海道新聞23面「約束、次々ホゴに／北大問われるアイヌ研究」
- 1986年9月18日付北海道新聞「眠らすの？児玉コレクション／遺族と約束、展示施設／財政難でメド立たず」
- 2010年1月30日付読売新聞「北大医学部、アイヌ民族の副葬品28箱分を放置」
- 『医師児玉善吉の略伝』 児玉家所蔵
- 『故児玉モト略伝』 児玉家所蔵
- 『児玉作左衛門他関係資料綴』 鹿角市先人顕彰館所蔵
- 『此度北海道ニ参ル理由并ニ此後之心得』 児玉家所蔵
- 『児玉作左衛門昭和改正原戸籍』 児玉家所蔵
- 『児玉作左衛門履歴書』 児玉家所蔵
- 『少年の頃の思い出』 児玉家所蔵
- 『中部高校七十周年記念式典 七十才の一老人の回顧』 児玉家所蔵
- 『3つの思いで』 児玉家所蔵

<sup>i</sup> 児玉家所蔵「医師児玉善吉の略伝」より。盛岡の医学専門学校としては岩手医科大学の前身である岩手医学専門学校があり、同学は1897(明治30)年に市立岩手医学校として開学したのが最初である。同略伝にある盛岡医学専門学校と市立岩手医学校が同じものであるかは不明。

<sup>ii</sup> 長谷部2000や2016などでは「鹿角郡柴平村生まれ」となっているが、児玉家所蔵資料の児玉作左衛門直筆原稿「少年の頃の思い出」から、父：児玉善吉の出生地が鹿角郡小枝指村(1876(明治9)年の合併で平元村、1889(明治22)年の合併で柴平村となる)であり、児玉自身の出生地は東京であったことがわかった。

- iii 同「少年の頃の思い出」文中に「父は一時秋田県の花輪町で開業したが、向いにあった小学校やそのそばの法華寺に遊びに行ったことも楽しい思い出である。」とあり、明治中期に花輪小学校があったのが前述の住所である。後に同地には鹿角郡公会堂が建てられており（現存・鹿角市指定有形文化財）、隣接していた法華寺とは法華宗本勝寺（同地に現存）のことであると考えられる。
- iv 1933(昭和8)年刊「大日本職業別明細図」では、同地に児玉の長姉：トヨの婚家である虎渡眼科が所在している。
- v 前出「少年の頃の思い出」より。全文原文ママ。
- vi 現在の函館市立弥生小学校には、級長をしていた児玉の写真が残されている。
- vii 「少年の頃の思い出」より。全文原文ママ。
- viii 児玉の函館中学校在学時には、後に函館博物館へ国指定重要有形民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」を始めとする資料群「馬場コレクション」を売却・寄贈する馬場脩(1892-1979)も1年上級に在学していた。
- ix 児玉の長女：児玉マリ氏によるご教示(2012年1月)。
- x 当初文部省から官費留学生として2年間の留学予定であったが、マルク安のために期間延長を申し出、1925(大正4)年7月2日付で私費での延長を許可されている。児玉マリ氏によるご教示(2012年1月)ならびに「児玉作左衛門履歴書」(児玉家所蔵)より。
- xi 1923(大正12)年3月18日付函館新聞広告欄より。なお、その後児玉眼科病院は長姉：トヨの婚家である虎渡家がしばらく院主を務めたのち、人手に渡ったという。児玉マリ氏によるご教示(2012年1月)。
- xii 本来「遺骨」と表記するのが適当と考えられる場合もあるが、本稿では便宜的に「人骨」で統一して表記する。
- xiii 児玉は1936(昭和11)年の報告書において、現地の古老ですらその場所を墓地として認識していなかったことなどを挙げて「墓地遺跡」と表現している。ただこのことについては、墓域を忌避するアイヌの習慣について考慮する必要がある。
- xiv 児玉マリ氏によるご教示(2012年1月)。
- xv 児玉家所蔵の児玉作左衛門直筆原稿「三つの思い出」より。原稿用紙に「北海道大学医学部学友会フラテ編集部」の印が押され、冒頭に「昭和三十四年五月十五日」と書かれていることから、北大医学部学友会が刊行していた雑誌『Frater』に1959年頃掲載されたものと考えられる。全文原文ママ。
- xvi 北方文化研究室は1966(昭和41)年に北方文化研究施設となり、『北方文化研究報告』は『ユーラシア文化研究』と合併して『北方文化研究』に改題される。【高倉1982】
- xvii 1949(昭和24)年の発掘調査でサイベ沢遺跡か

ら出土した遺物は、函館博物館で保管されていたもののうち29点が1971(昭和46)年3月5日付で北海道指定有形文化財となり、児玉が保管していたもの(1998(平成10)年に函館博物館へ寄贈)は指定外となっている。

xviii 札幌古書籍商組合ホームページ内「組合の沿革」による。

xix 以上、児玉マリ氏によるご教示(2012年2月)。

xx 阿部龍吾は函館市在住の考古学者であり、当時の函館図書館長岡田健蔵らと函館考古会を結成し、函館市内外で発掘調査を行っていた人物である。のちに児玉家から函館博物館に寄贈される土器の中には、阿部龍吾によって註記されているものが見受けられる。

xxi 児玉マリ氏によるご教示(2012年2月)。当時は戦後間もない時期で治安も悪く、紐でつないだ百円札の束(購入金額140,000円)をシャツの下に腹巻きのように巻いて買いに行ったということである。

xxii 児玉マリ氏によるご教示(2012年2月)。

xxiii 1971(昭和46)年の日本手芸普及協会「北の文化遺産 アイヌ服飾展」、1972年(昭和47)年のサントリー美術館特別陳列「アイヌの文様展」など。

xxiv 児玉マリ氏によると、児玉家から貸し出された民具資料は、北大を訪れる来賓にアイヌ文化を紹介するためのものであったという(2012年3月聞き取り)。

xxv 児玉家から貸し出されていた資料には、児玉の高弟である大場利夫によって「借」と書いた木札がつけられており、それを基準に資料を選別していたとのこと。児玉マリ氏によるご教示(2012年3月)。

xxvi 以上、児玉マリ氏によるご教示(2012年3月)。

xxvii 児玉個人収集資料については、後述する函館博物館とアイヌ民族博物館から各2冊ずつ刊行された資料目録の合算値である。

xxviii この数量は1980(昭和55)年に寄託されたときの物であり、このうち民族資料6点は後に児玉家に返却されている。この寄託・返却・寄贈などについては後の項で詳述する。

xxix これらの児玉家に入った出土資料と、北大に残された同遺跡出土資料との線引きについては不明である。

xxx 児玉マリ氏によるご教示(2012年3月)。

xxxi 目録には1981(昭和56)年および1984(昭和59)年に寄託された2,313件が掲載されているが、1998(平成10)年に寄贈となった際に42件が児玉家に返却されるなどして寄贈件数は2,271件となっている。また、その後8件の追加寄贈(函館博物館から児玉家に返却された衣服6件含む)があったため、現在の総計は2,279件である。村木美幸氏によるご教示(2012年3月)。

xxxii 特に北海道民族問題研究会代表海馬沢博か

らの盗掘批判・保管状況提示や人骨・副葬品返還の要求以降、広く認識されるようになったと考えられる。

<sup>xxxiii</sup> 2012(平成24)年以降、浦河町や紋別市、浦幌町で収集された人骨について、返還と感謝料の支払いを求めて提訴されたが、2016(平成28)年3月25日には浦河、同年11月25日には紋別について和解が成立している。

<sup>xxxiv</sup> この際の寄託申込書では、寄託期間については「永久寄託」となっており、目録刊行および資料展示がなされた際には「寄贈」となるとしてある。

<sup>xxxv</sup> 函館市北方民族資料・石川啄木資料館で展示されていた石川啄木関係資料は、この時に開館した函館市文学館に移されている。

<sup>xxxvi</sup> 資料受入検品の際、2名の学芸員が手分けして手書き黒文字のリスト(黒版)と手書き赤文字のリスト(赤版)を作成した。これらは後日ワープロ入力され、1994(平成6)年4月11日に出力されている。

<sup>xxxvii</sup> 当該資料の移送に係る随意契約理由書中「随意契約理由」より。原文ママ。

<sup>xxxviii</sup> 小川隆吉氏からの開示請求に対して、2008(平成20)年9月4日付で北大が開示した。現在は「北大開示文書研究会」のホームページでダウンロード・閲覧することが可能である。

<sup>xxxix</sup> たとえば白布切抜文衣(カパラミブ)は「K」に枝番号をつけて分類され、樹皮衣(アットウシ)は「A」に枝番号をつけて分類されるなどしている。

<sup>xi</sup> エナメルで注記された番号をソートした情報。

<sup>xii</sup> 以上、児玉マリ氏によるご教示(2012年5月)。

<sup>xiii</sup> 1980(昭和55)年に寄託された資料の民族資料目録には2,792件が掲載されているが、1989(平成元)年に衣服7件(児玉Ⅱ-0001・0043・0047・0050・0052・0157・0158)が返却され、1998(平成10)年の寄贈時にも同じく衣服6件(児玉Ⅱ-0119・0131・0145・0168・0186)が児玉家に返却された。ただし1989(平成元)年に返却されたもののうち、児玉Ⅱ-0001を除く6件は1998(平成10)年の寄贈時に改めて寄贈され、児玉Ⅱ-0001は平成14(2002)年の第四次寄託時に再寄託されている。よって、実際に函館博物館で現物が確認できる目録民族資料編掲載資料は、2,786件3,068点となっている。

<sup>xliii</sup> 当初配属された臨時職員は、世界的な不況の影響による緊急雇用対策として雇用されたものである。

<sup>xliv</sup> 2003(平成15)年度持ち込み資料の整理に際しては、全資料を燻蒸・清拭した上で、臨時職員による作業となることを勘案して手書き資料などを別にし、図書刊行物のみ配架・データ入力・寄贈手続を行った。この時に整理・登録を行わなかった児玉手書き資料等については、後に学芸員による調査・整理を行った。

児玉作左衛門略年譜

年	月	日	年齢	事象
1895	12	3	0	児玉善吉・モト夫婦の第4子次男として東京で出生
				秋田県鹿角郡に転居し、父が花輪町字中花輪で眼科医院開業
1901	8	17	5	北海道函館区曙町14番地に転籍
				函館区宝町1番地に転居し、父が児玉眼科病院開業
1908	3		12	弥生高等小学校高等第二学年 修了
	4	9		北海道庁立函館中学校 入学
1913	3	22	17	北海道庁立函館中学校 卒業
	4			第二高等学校 入学
				第二高等学校 卒業
1916	6	30	20	東北帝国大学医科大学 入学
	7	10		東北帝国大学医学部 学士学位授与
1920	7	12	24	東北帝国大学医学部 助手
				熊本県講員塚で発掘調査
1921	8	2	25	東北帝国大学医学部 助教授
1922	12	25	27	文部省から解剖学一般研究のため満二年間ドイツ及スイスへ在留申付
1923	4			チューリッヒ大学脳解剖学研究所に留学し、Dr.Monakowに師事
1925	7	2	29	文部省から留学満期後大正十五年三月三十日迄私費滞在の件許可
1926	6	27	30	帰国
1927				学術論文「Über die sog. Basalganglien」『Schweiger Archiv für Neurologie und Psychiatrie』20(2)
	7	13		東北帝国大学医学部 博士学位授与
1928		11	32	学術論文「Beiträge zur normalen Anatomie des Corpus Luysii beim Menschen (所謂前脳基底核二就テ)」『Arbeiten aus dem Anatomischen Institut der Kaiserlich-Japanischen Universität zu Sendai』13
				学術書『Pathologisch-anatomische Untersuchungen mit Bezug auf die sog. Basalganglien und ihre Adnexe』
1929	5	10	33	北海道帝国大学医学部 教授
1932	7		36	学術論文「Beiträge zur Morphologie des Globus pallidus beim Menschen.」『北海道医学雑誌』第10年記念号
1933	4		37	講演「硬脳膜に現るる雑糞の大脳に及ぼす影響に就いて」第41回解剖学会
	11	10		日本学術振興会第八小委員会 委員
	4			講演「上大脳静脈と上矢状洞との連携に就て」第42回解剖学会
1934	5			北海道八雲町で発掘調査
	6		38	北海道長万部町で発掘調査
	7	4		勲四等瑞宝章 受章
	10			北海道浦幌村で発掘調査
	4	1		研究発表「北海道八雲アイヌ人頭骨に於ける虫歯について」大阪帝国大学医学部第4回学術大会
1935	7		39	講演「中大脳静脈と硬脳膜静脈洞の連携に就て」第43回解剖学会
				北海道森村で発掘調査
	9			北海道落部村で発掘調査
	4			講演「岩鱗静脈洞に就て」第44回解剖学会
1936	7	13	40	樺太東海岸栄浜・内淵・魯礼で発掘調査
	9			陸軍大演習昭和天皇御前講演「アイヌ頭蓋について」
	11			学術論文「八雲ユーラップに於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」『北海道大学医学部解剖学教室研究報告』1
	1	21		講演「アイヌ頭蓋骨について」東京帝国大学医学部
	4			研究発表「アイヌの頭蓋骨に就て」『東京人類学会・日本民族学会第3回聯合大会第二回記事』
1937	7		41	北千島シュムシュ島で発掘調査
	8			北海道帝国大学北方文化研究室開設 委員委嘱
	11			学術論文「Über den Abflussweg der mittleren Gehirnvenen」『北海道医学雑誌』第15周年記念号
	4	7		研究発表「占守島出土の千島アイヌ頭蓋骨の人類学的研究」人類学会・民族学会第3回聯合大会
	7			北千島シュムシュ島で発掘調査(児玉自身は同行せず)
1938	8	13	42	勲三等瑞宝章 受章
	9			講演「「アイノ」民族に就て」『第28回関東北医師大会特別講演別冊』
	10	9		札幌ハリストス正教会で千島アイヌのバニヒダ執行
				学術論文「アイヌ民族に於ける妊婦屍体解剖の奇習」『北海警友』
	3	25		学術論文「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」『北方文化研究報告』1
	6			北海道帝国大学臨時附属医学専門部 講師
1939			43	北海道余市町で発掘調査
	10			学術論文「アイヌ文身の研究」(伊藤昌一共著)『北方文化研究報告』2
		31		札幌ハリストス正教会で千島アイヌのバニヒダ執行
	5			学術論文「樺太アイヌ文身の研究」(伊藤昌一共著)『北方文化研究報告』3
	7			学術論文「千島アイヌ」『南千島色丹島誌』
1940			44	北海道網走市モヨロ貝塚で発掘調査
	8	15		紀元二千六百年祝典記念章 受章
	10	27		札幌ハリストス正教会で千島アイヌのバニヒダ執行
	11			学術論文「アイヌの頭蓋骨及骨学」『人類学・先史学講座』18
	2			学術論文「デ・アンジェリスの蝦夷国報告書に就て」『北方文化研究報告』4
	7			学術論文「アイヌ髪容の研究」(伊藤昌一共著)『北方文化研究報告』5
1941	8		45	大曲洞窟遺跡発掘調査
	12			学術書『人体解剖図譜 中枢神経系』5(小川鼎三共編)
				北海道網走市モヨロ貝塚で発掘調査(米村喜男衛・伊藤昌一共同調査)
	1	16		北海道帝国大学学生主事兼任 発令
	2			学術論文「外国文献に現はれたる初期の北海道」『北海道文化史考』
1942	9		46	学術論文「アイヌ髪容の研究補遺」(伊藤昌一共著)『北方文化研究報告』6
	11			学術論文「Über die Körnerinseln des Tuberculum olfactorium im Großhirn」『Arbeiten aus dem Anatomischen Institut der Kaiserlich-Japanischen Universität zu Sendai』25
	1			講演「アイヌ民族に就て」桑田講演第1号
1943	2	15	47	北海道帝国大学 評議員
				学術論文「占守島に於ける人類学的発掘」『北の会報』1(1)
	12	13		北海道帝国大学医学部長兼臨時附属医学専門部 講師
	1	22		依願免任官(学生主事)
1944	2	15	48	学術研究会議 会員
	3			学術論文「アイヌ」『東亞民族要誌資料』2
1945	12	28	50	依願免北海道帝国大学医学部長並付属医学専門部長 北海道立女子医学専門学校 講師

1946			北海道大学医学部 経理委員 北海道大学医学部 渉外委員
1947	12		51 学術論文「モヨロ貝塚の民族に就て」『新臨床』2(3)
	3	31	北海道大学北方文化研究室 主任
	4		学術書『モヨロ貝塚』
1948			52 北海道網走市モヨロ貝塚で発掘調査
	10		北海道大学医学部付属病院厚生女学部 講師
	11	1	市立函館博物館 事務
	11	13	第二回北海道新聞文化賞 受賞
	4		講演「人脳弁蓋島葉面の脳溝に就て」第54回解剖学会
	6		講演「アイヌ民族の食生活」第25回北海道医学会
1949	5		53 北海道桔梗村サイベ沢遺跡で発掘調査
	7		北海道礼文島船泊砂丘遺跡で発掘調査
	11		学術論文「北海道の先住民族」『北海道先史学』12
	12	15	北海道立博物館設置準備審議会 委員
	7		講演「アイヌ民族の脳の形態学的研究 第1 大脳半球外側面の脳溝」(松野正彦・橋本秀夫共著) 第55回解剖学会
	8		54 北海道函館市住吉町遺跡で発掘調査
	8	23	北海道函館市春日町遺跡で発掘調査
1950	11		学術論文「モヨロ貝塚人の埋葬法」『考古学雑誌』36(4)
			国立科学博物館設置委員会 委員
			医師国家試験 委員
1951	2		55 講演「所謂島限Limen insulae(Schwalbe)の本態に就て」第2回解剖学会北海道地方会
	4		講演「人脳の形態学上の諸問題」第56回解剖学会
	12		学術論文「人脳の形態学上の諸問題」『解剖学雑誌』26(4)
	3	25	56 学術論文「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』7 (大場利夫共著)
	4		研究発表「日高東部アイヌ生体の人類学的調査」第57回解剖学会誌上发表
	4		研究発表「日高アイヌ頭蓋骨に於ける歯牙の人類学的研究」第57回解剖学会誌上发表
	4		研究発表「日本人大脳動脈系統の研究」第57回解剖学会誌上发表
	2		講演「人脳硬膜の血管分布の研究」第4回解剖学会北海道地方会
	3		学術論文「A collaborative genetical survey in Ainu: Hidaka, Island of Hokkaido.」(R.T.Simmons, N.M.Semple, J.J.Graydon共著)『American Journal of physical Anthropology』11(1)
	25		学術論文「函館市住吉町遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』8
1953	5		57 講演「人脳後嗅葉の形態学的研究」第58回解剖学会
	8		研究発表「人の小脳動脈系統の研究」(門馬文雄共著) 第58回解剖学会誌上发表
	8		第8回日本人類学会・日本民族学協会連合大会大会 委員長
	8		研究発表「アイヌの形質学的問題」第8回日本人類学会・日本民族学協会連合大会アイヌ問題シンポジウム
			学術論文「色丹アイヌとバニヒダの思い出」『北大季刊』4
	2		講演「脳重385瓦の小頭蓋骨について」(松野正彦共著) 第5回解剖学会北海道地方会
	3	25	58 学術論文「函館市春日町出土の遺物に就て」(大場利夫共著)『北方文化研究報告』9
	5		学術論文「蝦夷に関する耶蘇会士の報告」(高倉・工藤共著)『北方文化研究報告』9
	5		講演「アイヌ民族の脳の形態学的研究 第2 大脳半球側面の脳溝」(松野正彦・中林一郎共著) 第59回解剖学会
	7		学術論文「The Okhotsk Culture -A protohistoric culture of the northeastern Asiatic littoral.」(H.A.Maccord共著)『19th Annual Meeting of Society for American Archaeology』
	9		北海道札幌市北大遺跡で発掘調査
	9		北海道根室市温根沼遺跡で発掘調査
	3	25	59 学術論文「北大遺跡について」『北方文化研究報告』10
	7		学術論文「網走市大曲洞窟出土の遺物について」『北方文化研究報告』10
	7		北海道遠軽町下社名淵遺跡で発掘調査
			学術論文「アイヌ民族の生態」『日本農村医学会雑誌』3(4)
	3	25	60 学術論文「根室国温根沼遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』11
	7		学術論文「アイヌの体質」『日本文化財』15
	8		北海道静内町で発掘調査
	8		北海道白滝村白滝遺跡で発掘調査
1957	3	25	61 学術論文「遠軽町下社名淵(家庭学校)遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』12
	3	25	62 学術論文「ラブレットについて」『北方文化研究報告』13
	9		学術論文「湧別遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』13
	9		北海道静内町で発掘調査
	3	16	寄稿「ドクロとともに-アイヌ研究の三十年」1959.03.16付北海道新聞
1959	4	22	63 北海道大学定年退官 北海道大学名誉教授
	9		論文「アイヌと日本人の大脳脳溝の形態学的比較」『日本の医学の1959年』I
1960	11	3	64 紫綬褒章 受賞
			学術論文「アイヌ民族について」『日本薬剤師協会雑誌』13(8)
1961	11	25	65 学術論文「アイヌ民族について」『日本数学教育学会誌 臨時増刊 総会特集号』43
	3		学術論文「アイヌと東日本」『国文学解釈と鑑賞』28(5)
1963	11		67 北海道帯広市伏古で発掘調査
1965	3	16	69 医師免許証交付
	11		北海道文化賞 受賞
	3	25	学術論文「江戸時代初期のアイヌ服飾の研究」『北方文化研究報告』20
	4	15	一般著述「消えゆくアイヌの姿」『話』135
	5	1	70 第二回北海道観光大会北海道観光功労賞 受賞
	8		北海道江別市対雁で発掘調査
	11	3	勲二等旭日重光章 受賞
			学術論文「アイヌの衣服と文様」『東洋学術研究』4(11)
1968	3		72 学術論文「阿倍臣比羅夫の渡島遠征に関する諸問題-1-渡島蝦夷と陸奥蝦夷」『北方文化研究』3
	7	10	北海道教育委員会アイヌ文化保存対策協議会 委員
1969			73 寄稿「緊急を要したアイヌ研究-私のあゆんだ道」『からだの科学』26
	3		学術論文「阿倍臣比羅夫の遠島遠征に関する諸問題-2-」『北方文化研究』4
1970			74 学術論文「アイヌ頭蓋に見られる損傷問題」『北海道医学雑誌』45(2)
			学術書『Ainu: historical and anthropological studies』
	12	26	75 1時17分 死亡
1971	3		学術書『明治前日本人類学・先史学史-アイヌ民族史の研究(黎明期)』

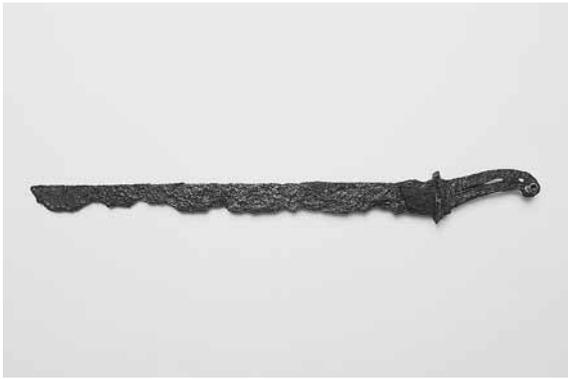
## 在函館児玉コレクション内訳

分類	申込日	決裁日	申し込み物件名	申込数量	受入確認時数量	整理後数量	経緯	備考
寄贈資料	第一次寄託	1980.08.01	1980.10.03	児玉コレクション ※1	約7,930点	6,051件	昭和55年度寄託 →平成10年度寄贈	1987年整理完了、 目録刊行済
	第二次寄託	1994.02.01	1994.03.02	児玉コレクション	1,626件	749件	平成5年度寄託 →平成10年度寄贈	2012年整理完了、 目録未刊行
	第三次寄託	1994.08.30	1994.09.01	アイヌの墓標ほか	20件	20件	平成6年度寄託 →平成10年度寄贈	2012年整理完了、 目録未刊行
	第一次寄贈	1998.11.17	1998.11.17	考古・民族資料 ※2	27件	27件	第一次～三次寄託 +α寄贈	2013年整理完了、 目録未刊行
	第二次寄贈	2010.08.26	2010.08.26	児玉作左衛門旧蔵図書 他	4,442件 6,004点	4,442件 6,004点	平成15年度預かり →平成22年度寄贈	2010年整理完了、 目録未刊行
	第三次寄贈	2016.11.01	2016.11.04	深鉢形土器 他	7件 1,773点	7件 1,773点		2016年整理完了、 目録未刊行
	第四次寄託	2002.02.22	2002.03.07	首飾りほか	452件	452件		2013年整理完了、 目録未刊行
	借用資料		1993.01.18	文書・古地図など ※3	11件 22点	11件 22点		整理済・目録未刊行
					5件 12点	5件 12点		

※1：第一次寄託の「申込日」と「決裁日」は寄託時のものであり、これらの寄贈にかかる「申込日」と「決裁日」は、第一次寄贈と同じ。

※2：この一覧の第一次寄託の数量は第一次～第三次寄託の数量を除いてある（経緯欄の「+α」の数量のみ表記）ため、第一次寄贈時に寄贈された資料の総数はこの一覧の第一～三次寄託と第一次寄贈の数量を合算する。

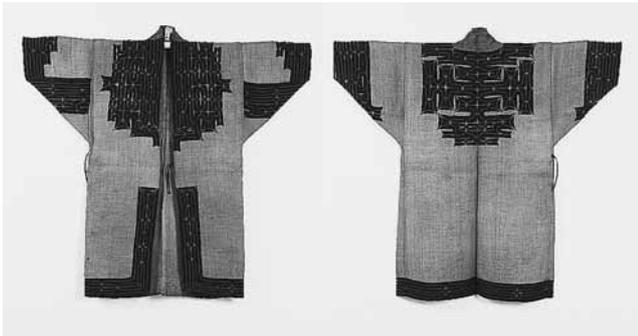
※3：借用資料の「整理後数量」からは、民族資料1件4点・考古資料3件4点（第一次寄贈移行）ならびに民族資料1件1点・研究資料1件1点（第四次寄託移行）を除くしてある。



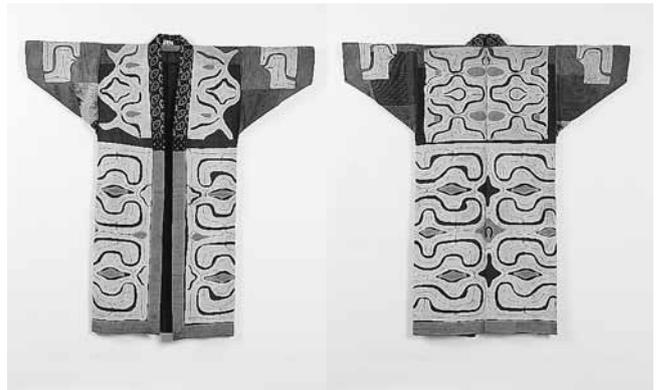
蕨手刀  
(児玉 I-3353)



装身具  
(児玉 I-3358)



樹皮衣  
(児玉 II-0011)



白布切抜文衣  
(児玉 II-0154)



葬儀用編み袋  
(H10-51-03-01)



鍬先  
(H10-51-04-427)



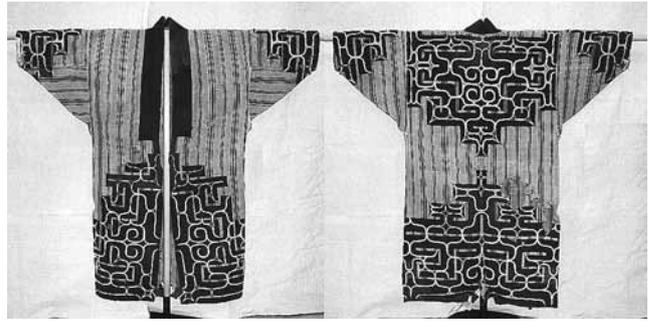
盆  
(H10-51-05-14)



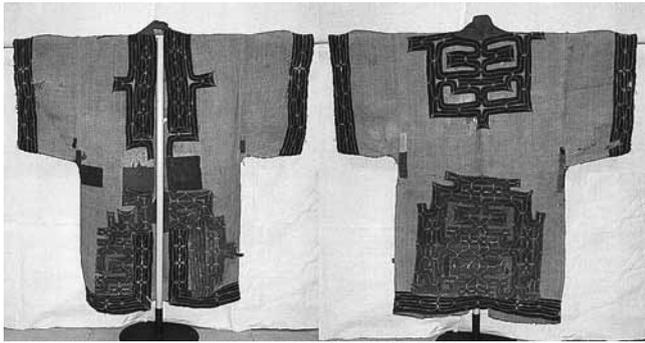
団子へら  
(H10-51-06-06)



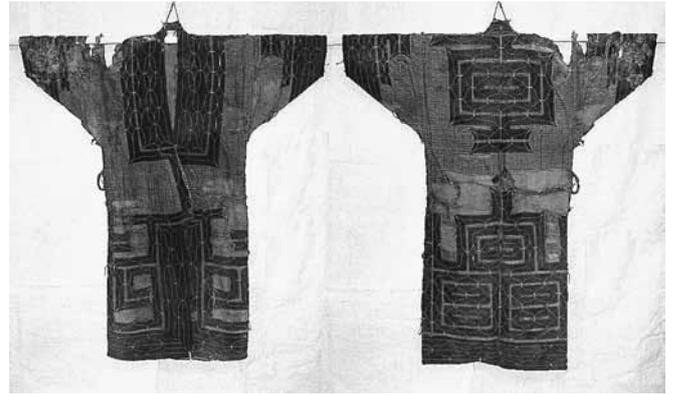
樹皮衣  
(H10-51-07-01)



樹皮衣  
(H10-51-07-02)



樹皮衣  
(H10-51-07-03)



黒裂置文衣  
(H10-51-07-04)



黒裂置文衣  
(H10-51-07-05)



黒裂置文衣  
(H10-51-07-06)



女性用物入れ  
(H10-51-08-03)



狩猟用矢筒  
(H10-51-09-117)



家 (模型)  
(H10-51-10-01)



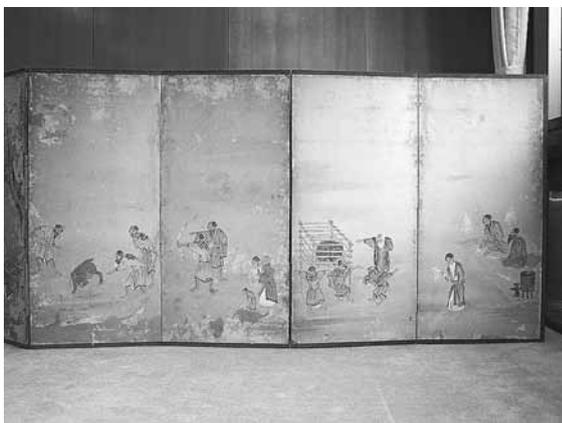
ラレット  
(H10-51-11-01)



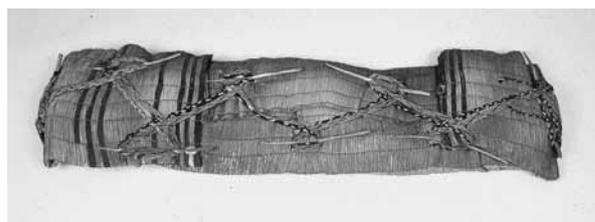
尖底深鉢形土器  
(H10-51-12-01)



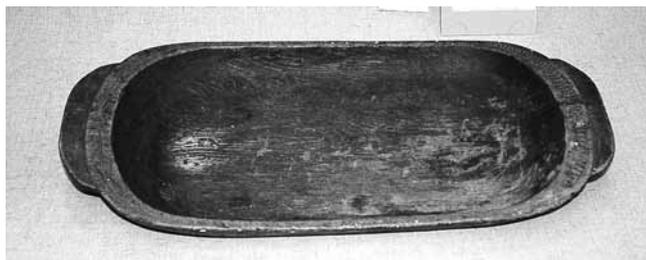
壺形土器  
(H10-51-13-05)



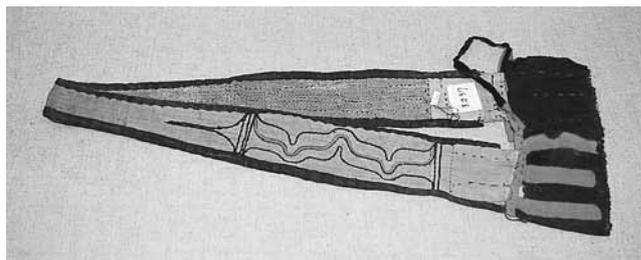
アイヌ絵 (熊送り)  
(H10-51-14)



葬儀用キナ  
(H10-51-15-02)



木製皿  
(H10-51-17)



刀掛帯  
(H10-51-18-07)



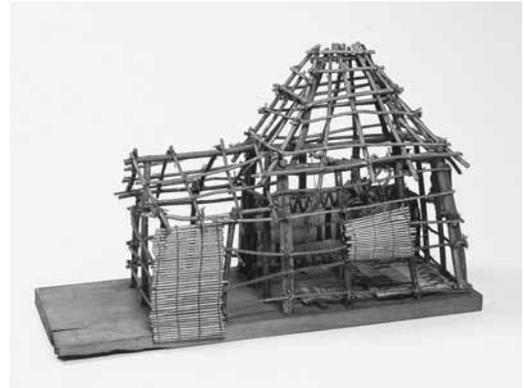
棒酒箸  
(H10-51-19-01)



刀柄  
(H10-51-20-30)



盆  
(H10-51-21)



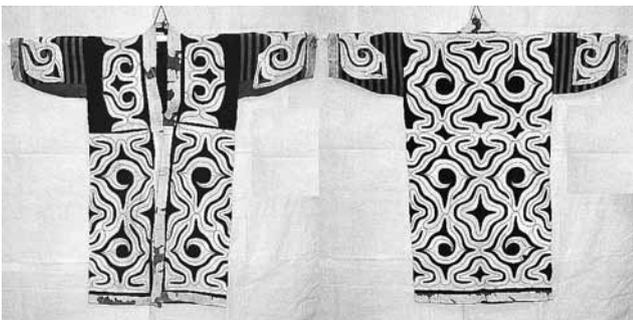
家 (模型)  
(H10-51-22)



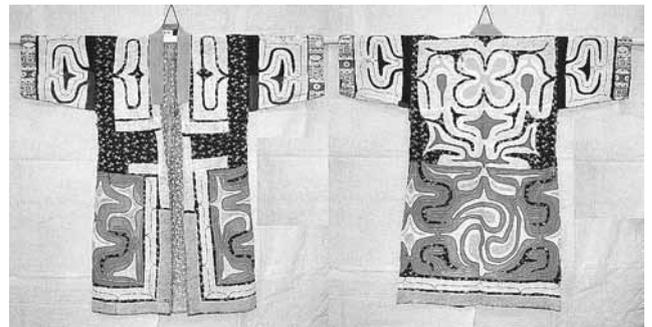
黒裂置文衣  
(H10-51-23-01)



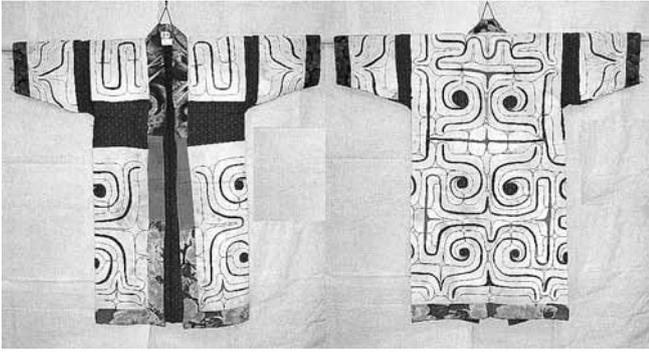
黒裂置文衣  
(H10-51-23-02)



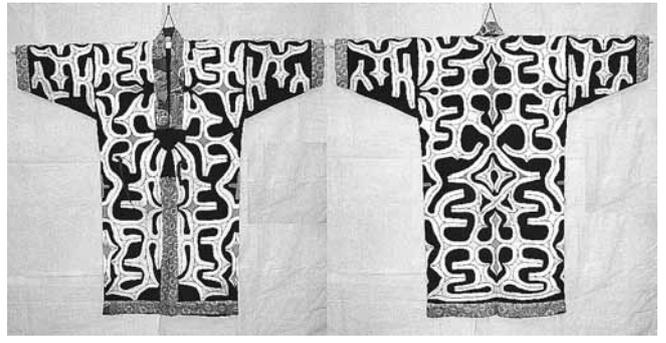
白布切抜文衣  
(H10-51-23-05)



白布切抜文衣  
(H10-51-23-07)



白布切抜文衣  
(H10-51-23-08)



白布切抜文衣  
(H10-51-23-10)



首飾り  
(H10-51-24-08)



ござ編み機  
(H10-51-25)



編機一式  
(H10-51-26-01)



糸玉  
(H10-51-27-01)



死者用靴  
(H10-51-28-02)



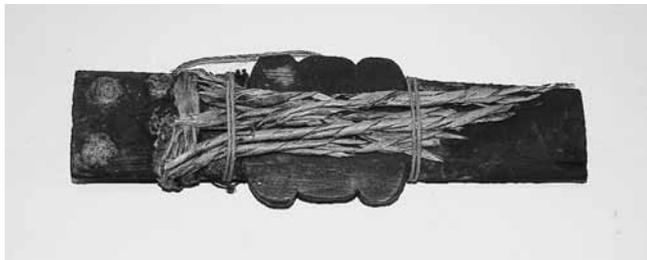
死者用背負い縄  
(H10-51-29-19)



色裂置文衣  
(H10-51-30-02)



まじない用木刀  
(H10-51-31-02)



まじない用矢筒  
(H10-51-32-02)



小刀  
(H10-51-33-03)



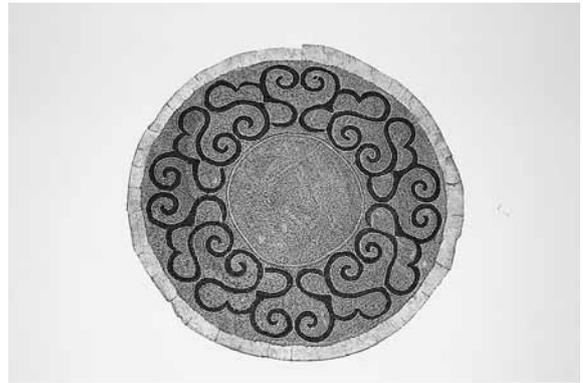
樺皮製容器  
(H10-51-34)



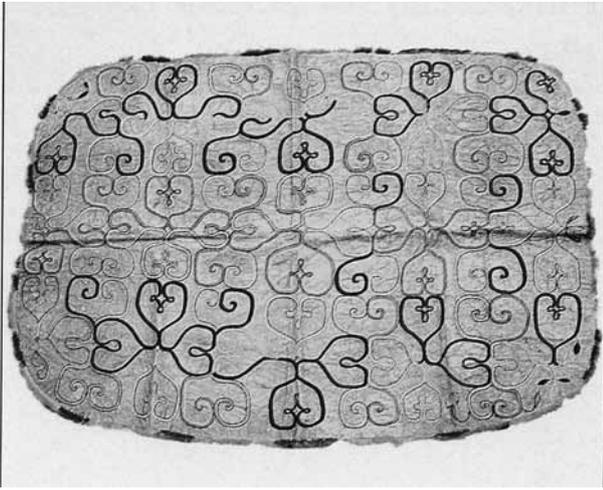
財布  
(H10-51-35-02)



煙草入れ  
(H10-51-36-02)



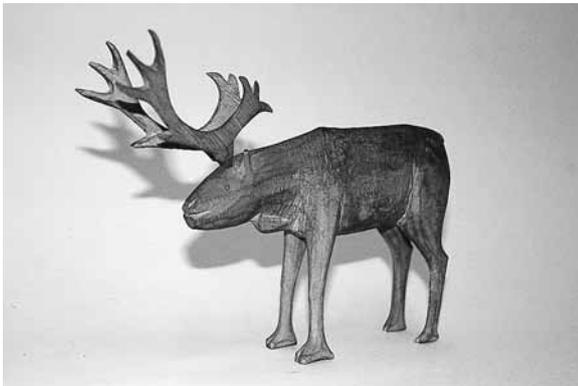
皿敷  
(H10-51-37-01)



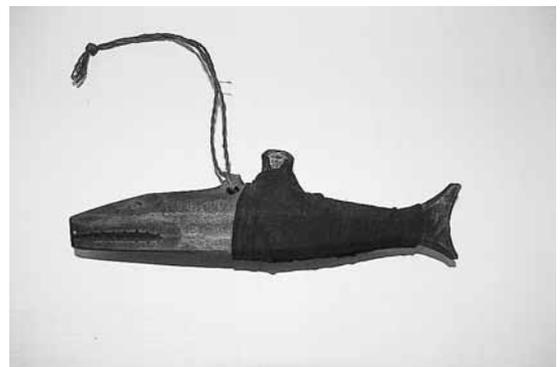
敷物  
(H10-51-38)



治療用首飾り  
(H10-51-39)



トナカイ木偶  
(H10-51-40)



木偶  
(H10-51-41-02)



熊形骨偶  
(H10-51-42-02)



青銅製矩形帯飾り  
(H10-51-43)



青銅製耳飾り  
(H10-51-44)



アイヌ絵  
(H10-51-45-33)



アイヌ絵  
(H10-51-45-34)



アイヌ絵  
(H10-51-45-35)



アイヌ絵  
(H10-51-45-38)



アイヌ絵  
(H10-51-45-39)



蝦夷島奇観  
(H10-51-45-43)



アイヌ絵  
(H10-51-45-42)



蝦夷島奇観  
(H10-51-45-44)



北樺太西岸図  
(H10-51-45-47)

市立函館博物館 研究紀要 第27号

2017年3月31日 発行

---

編集・発行 市立函館博物館

〒040-0044 函館市青柳町17-1(函館公園内)  
TEL. 0138-23-5480 FAX. 0138-23-0831

印刷 有限会社 共立印刷

〒040-0077 函館市吉川町6-6  
TEL. 0138-43-7650 FAX. 0138-43-1475

**BULLETIN**  
**OF**  
**HAKODATE CITY MUSEUM**

No. 27

---

**C O N T E N T S**

**Preface**

KYOSUKE OYA

“Report on collecting the course of KODAMA collection”

---

2017

Publisher : Hakodate City Museum

17-1,Aoyagi-cho,Hakodate,Hokkaido,Japan 040-0044

Phone.+81-138-23-5480 Fax. +81-138-23-0831